



異世界に存在する大陸、ミュールゲニア。

科学文明の魔手はまだこの地を覆うことなく、廃れつつあるとはいえ、いにしえより伝わる魔法も細々と受け継がれている。

そんな、剣と魔法が支配する世界――

大陸南西部に位置する小国サンクワールは、レインの奇策^{きさく}と皆の団結により、先のザーマイン戦に辛くも勝利を得た。

だが、最終的な勝利は未だ遠く、大国ザーマインとレイグル王の脅威^{きょうい}が去ったわけではない。

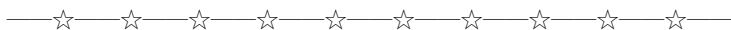
レインは早速、シェルファを新国王とする国の再建に着手する。もちろん軍備の再編は最重要課題で、ザーマインの再侵攻にも備え始めている。

しかし、晴れの戴冠式^{たいかんしき}を目前にして、サンクワールにまたしても暗雲が立ち籠める。

新時代の王となるはずのシェルファの前に、新たなる敵が現れたのだ！

シェルファの窮地^{きゅうち}を救うため、レインは再び青白き魔剣をその手にとる。

その頃、サンクワールの隣国シャンドリスでは、ある一人の英雄がレインに目を付けていた――



※度量衡はあえてそのままにしています。

レイン

招かれざる帰還 2

よしの たくみ
吉野 匠



目次

プロローグ 7

第一章 夢見る少女 13

第二章 王女暗殺 63

第三章 お披露目ひろめの日 131

第四章 招かれざる帰還 195

第五章 神将しんしょうV S 天才、もし戦わば 251

エピローグ 怪盗ブラック仮面 291

番外編 贈る言葉 295

あとがき 402

プロローグ

「やはりあの男は、狼だったか」

騎士隊長のシングが、隣国サンクワールの最新情報を伝えた時の、大將軍の返事である。

ここシャンドリスの国では知らぬ者のない英雄であり、周囲の国々にも「不敗の神将^{しんしょう}」と呼ばれるジョウ・ランベルクは、外見からしてただ者ではない。

思わず見とれる深緑^{しんりよく}の瞳、何度も戦塵^{せんじん}を浴びたくせに、一向にその影響が出ない白い肌、人柄をそのまま表したような優しい顔立ち。

窓から差し込む光に、銀の髪が美しく映える。

武辺者^{ぶへんしや}のシングですら、ため息が出そうな美貌^{びぼう}である。つまり、外見だけでは絶対に現在の地位を見破れない。

しかし——現実^{げんじつ}に彼は、ここ何十年も敗北を知らずに来た歴戦の戦士であり、騎士なのだ。

(一体、この御方^{おかた}はおいくつなのだろう)

時折脳裏^{のうり}をよぎる疑問が、今もまた湧き起こった。どう見ても二十代そこそこにしか見えないの

だが――

「シング、他に報告することはないか」

「はっ」

シングは微かに首を振り、余計な考えを振り払った。どうでもいいことだ。自分は、この方を心から尊敬している……それだけで十分だ。

「続きですが……レイン殿の活躍で、サンクワールはひとまず危機を脱しました。以後は、彼と生き残りの上將軍であるラルファス殿とが王女を補佐し、国を建て直す模様です」

「ほお……ついに、王に睨まれる立場から、国の柱に格上げになったか。……彼なら当然だな」

ジョウは自室の窓にもたれ、両手を軽く組んだ。そんなごく当たり前の仕草でも、この男がやるとほれぼれするほど目を惹かれる。単純に、動作の一つ一つが美しいのだ。

シングは無意識のうちに息を吐き、おずおずと尋ねた。

「あの、ジョウ様。前から一度お尋ねしようと思っていたのですが――」

「聞こう」

「はい。その……なぜかジョウ様はレイン殿に関心がおありのようですが、それはなぜでしょうか」

「……顔に出ていたか」

ジョウは苦笑した。

「前から気付いていたのか、シング？」

「は、はあ……お気に障ったらお許ください」

そう、シングはかなり前からジョウの態度に気付いていた。慈悲深く心優しい大將軍だが、微笑むことは少ない。いつも超然としていて、めったに表情を動かさない。

そんな彼が、なにかの弾みで隣国のレインの名前を聞くと、ほんの微かに口元に笑みを浮かべる。それは、いつもは静かな湖に波紋が立ったようであり、シングは常々疑問に思っていたのだ。

「構わない。なにも隠すことでもあるまい。……つまり、私は彼に会ったことがあるのだ」

「お知り合いましたか！」

「知り合いとまではいかない。なにしろ、十年前に一度会っただけだからな」

「では、その時になにか話でもされて――」

「いや」

あっさりと否定し、ジョウはどこか遠くを見るような瞳をした。

「シング、おまえは信じられるか？ この私が、かつて敗北の予感に身を震わせたことがあると言ったら……」

「まさか！」

シングは言下に否定した。

なにが有り得ないと言って、それこそ絶対に有り得ない話だ。

「だが、事実なのだ。……私の長い人生で、あの時ほど自分の未熟を感じたことはない」

「まさか……剣を交えたのですか、レイン殿とっ」

「そうではない。ただ束の間、目が合っただけだ」

「……は？」

「それだけで十分だったのだよ、我々には」

ジョウは疑問を振り払うように言い切り、囁くように後を続けた。

「私は、今でもあの時の少年を夢に見る。ひっそりと立つ黒衣の少年を。しんと静まりかえった顔で、じっと私を睨み付けていた……『まるで狼のような目だ』と、その黒い瞳を見て思ったものだ。気高く孤高で、何ものにも膝を屈しない強さを感じたよ」

「はあ……」

曖昧な返事しか出来なかった。

そもそもシングが聞いた噂と一致しない。

噂によるとレインという男は、三步も歩けば大ボラを吹き、暇さえあれば浴びるほど酒を飲み、加えて同僚との協調性はなく、さらには命令無視はいつものこと、トドメに目も当てられないほど女癖が悪い——という物なのだが……ジョウ様のイメージと全然違うような。

噂では、単なる飲んだくれである。

しかし、ジョウを敬愛することの深いシングは、あえてなにも言わなかった。いや、ジョウ様が

そう言うのなら、噂が間違いなのだろう……多分。

「時に、シング」

「は、はいっ」

「陛下が現在、サンクワールとの同盟を結ぶべきか、迷っておられるのは知っているな」

「それはもう……どのみちザーマインとの戦いは避けられませんから、味方はいくらでも入り用でしょうし」

「うむ。近々、手を結ぶに足るか調べるため、かの国に使者をお出しになる——」

その使者には私が行こうと思う。

なんとなく聞いていたシングは、最後のセリフに飛び上がった。

「じよ、ジョウ様自らですか！」

「ああ」

ジョウは首肯し、後は自らの考えに没頭した。

あれから十年……あの時の少年はどこまで強くなっているだろうか。確かめなければならぬだろう。

第一章 夢見る少女



さあ、あなたの夢を叶える時が来たわよ、セルフィー！

サンクワールの主城たる、ガルフォート城。

その城門の前で、自分自身に気合を入れる少女がいた。

軽くウェーブした長い黒髪、薄緑の瞳。明らかにサンクワールの平民の出だとわかる。人目を惹く美しい顔立ちだが、残念なことに外見がみすばらしいため、その美貌が三割ほど減っている。

ピンク色のブラウスは何度も洗濯したことが窺えるほど色落ちしていたし、くすんだ白色をしたやや短めのスカートは、よく観察すると一カ所継ぎがあたっている。しかも、背中に背負ったズタ袋は今にも底が抜けそうだった。

変わっている点の一つ。

まだ少女のくせに、なぜかスカートの剣帯をし、似合わない長剣を下げている。で、その剣も、鞘は塗装がはげまくりだった。

武装していることを除けば、まさに全身で「貧乏人」を具現したような少女である。

それでも、城門の前を通る人々や行き交う城の関係者は、横目で必ず少女を見ていく。それだけ、

少女が見応えのある容貌ようぼうだったからだ。

ただし、見る者が見れば、彼女がただのお人形ではないとわかっただろう。

ぱっちりした瞳の底に、強靱きょうじんな意志の光が見え隠れしている。そして、それこそがこの少女の本質だった。

（やっとわたしの夢が叶う……がんばらなきゃ、絶対に合格しなきゃ。騎士になるんだから、絶対に！）

門の前で棒立ちすることしばし。セルフィーは緊張と感激で涙目になった顔をまっすぐ前へ向け、記念すべき一步を踏み出そうとした。

が、そこで急に肌が粟あわ立った。

体内に氷柱が生じたような、ぞくりとする感覚……圧倒的な威圧感。これまで通っていた道場の師からさえ、こんな強烈なプレッシャーを受けたことはない。さんと照る太陽が、いきなり陰ったような気さえた。

実際には長々と考えていた訳ではなく、セルフィーは「だめっ」と思う間もなく、体が勝手に反応してしまっていた。来る日も来る日も剣の稽古けいこに精を出して来たせいで、考えるより先に手が動いてしまったのだ。

道場で練習していた頃感覚が抜けていなかったし、加えて、彼女は少々おつちよこちよいなと

ころがあつた。なんにせよ――

セルフィーは目にも止まらぬ速さで帯剣たいけんを抜剣すると、振り向きざま真横へ一閃いっせんさせた。

（きやああつ！ これ、木剣じゃないのにつ）

頭の中を、リアルな想像が渦巻いた。

すなわち、運悪く彼女の背後に立ったというだけで血みどろで転がる、一般市民の姿である。騎士の試験どころではない、牢屋へ直行だろう……いや、死刑の宣告も有り得るかも。

しかし、それはセルフィーの傲慢ごうまんに過ぎなかった。あんなプレッシャーを放つ者が、一般市民のわけはなかったのだ。

もう絶対に間に合わない、撫で切りにしちゃうつ、と覚悟した時――

ふわつと風が舞い、彼女の前髪をわずかに持ち上げた。

セルフィーの瞳に、陽光を圧倒する青き閃光せんこうが映る。

「……ひっ」

意外な結果というなら、これほど意外な結果もないだろう。

まるでなにかの奇術のように、いつのまにか自分の喉元のどに突きつけられた魔法剣……魔剣を前に、かすれた悲鳴が漏れてしまった。

有り得ない！

戦慄せんなく唇でそう絶叫したかった。

なぜなら目の前の長身の男は、斬撃が己の身に当たる寸前まで、指一本動かさなかったのだ。棒立ちなのはちゃんと見えていた。

それがなぜ、土壇場になって一瞬で剣（しかも、魔剣だ！）を抜き、このわたしに突きつけたりできるのっ。そんなに反応速度に差があるの？ わ、わたしだってあんなに剣の道に励んだのに。

驚くことは他にもあった。

相手は動いて斬撃を避けたのではない。

セルフィーの攻撃は、男の左手が防いでいた。なんと彼は指の腹で剣腹を掴み、見事に止めてしまったのだ。

で、右手の魔剣はセルフィーの喉元にある。チャージされた強大な魔力の故か、青白い光が刀身をくまなく覆い、「ブウウウン」という多数の羽虫が立てるような音を響かせていた。

ロクに食べていないやせっぽちの女の子の一人や二人、余裕ですっぱりといきそうだった。

色んな意味で呆然と突っ立つ彼女を無視し、男はなぜか長々と息を吐いた。陶酔の表情で、ゆっくりと首を振る。

「前に一度使っただけの『片手白刃取り』を、もう自分の物にしてしまうとは——」

少し間をあけてから感に堪えないっ、という声音で、

「——まさに天才！ 時々、自分の才能に目眩を覚えるなあ……」

ひよ、ひよっとして自慢してるんですか!?

どつと緊張がゆるんだセルフィーである。

「おい！ こらっ」

と、男は急に素に戻って、じろりと彼女を睨み付けた。ただごとではない迫力である。

（こ、こわいっ）

思わず、自ら剣を落として後退……というか、石に蹴躓いて尻餅までついてしまった。

「いきなり斬りかかってくるとはどういう見だっ。もしおまえが女じゃなかったら、今頃は鼻血噴きながら十メートルはふっとんでる——」

そこで恫喝のセリフを中断し、男はふと、へたり込んだセルフィーを見下ろしたまま押し黙った。不機嫌そうな顔がごく真面目な表情に変わる。

お陰でやっつと、その長身の男をじっくり観察することができた。

黒皮のズボンに同じく黒いシャツ、履いている靴に至るまで真っ黒である。髪や目も黒いため、それこそ全身真っ黒だ。

それがファッションなのか、はたまた単に手入れを怠っているのか、ぼさつとした髪型で黒髪がところどころはねている。精悍な顔は思いつきり不敵そうで、時にふてぶてしい笑みが唇の端に見える隠れていた。

この世に怖い物などない……無言でそう主張しているような面構えだ。

セルフィーはなんとなく、獅子や狼などの大型の野獣が目の前に来て、自分を見下ろしているよ

うな気がした。

こいつ、昼飯になりそうかな、みたいなの。

男は魔剣を収めるとある一点に目を落としたまま、ポツリと呟いた。

「オーソドックスな白か……」

「……え？ あ、やだっ！」

かあつと頬が熱くなった。

セルフィーは弾かれたように立ち上がり、スカートの裾を手で押さえた。

「今頃押さえても遅いと思うぞ」

「ひ、ひどいですつ。意地悪ですつ。なんで注意してくれなかったんですか！ 見て見ぬ振りをするとか！ エッチですつ」

「馬鹿吐かせ！」

憤慨したように、男は大喝した。

「なんかの拍子に女の下着が見えたら、そりゃ見るに決まってるだろつ。注意する馬鹿がどこにいるんだつ」

あまりの迫力に、一瞬気を吞まれた。

足を止めて騒ぎを見物していた通行人達が、私語をふつりと止めるほどの、堂々たる主張だった。表情に一点のやましさもなく、自分の主張に疑問すら持っていないのがわかる。お陰で、セル

フィーでさえ顔色を白くした。

「だいたいだ」

と、男の主張はまだまだ続く。

「俺がガキの頃なんかおまえ、そういうチャンスがなかったら自分から作ったもんだぞ！」

「——それは、ただのスカートめくりじゃないですかつ」

さすがに我に返り、言い返す。

しかし男は歯牙にもかけず、

「なんであろうと、それが男だ。おい、おまえだって、そう思うだろつ」

いきなり、ビシッと門番の一人を指差す。

「ええつ。じ、自分ですか」

まだ子供に近いような年頃の彼は、なぜか後退した。騎士見習いの制服を着て、手に長槍を持っている。

「そうだよ。おまえだ。チャンスは逃さないよな、男なら」

「じ、自分はその……見えない角度に立っていましたし……だからその」

「おい、おまえ」

と、男はあわれな若者の肩をがっちり掴む。

「名前はなんと言う？」

「……お忘れですか。自分です、ミランですよ。ちよつと前に名乗りましたが」
「そんな名前、知らん！」

ばつさり切り捨て、じつと顔を覗き込む。

「それよりだ、俺が知る限りでいっとう怖い話があるんだが、ちよつと聞きたくないか」

「その話ならもう聞きましたよつ。城主に干されたMの話でしょつ。わかりましたよつ。自分も賛成ですつ。女の子が転んだら、それはすぐに見ますよ、ええつ！ 將軍のおっしゃる通りですつ」

若者は半泣きになって喚いた。ほとんどヤケクソである。セルフィーにはよくわからないが、過去にあの男となにかあつたらしい。肝心の男はすっかり忘れているようだが。

いや……それはどうでもよくて。

今、なにかとんでもない言葉――

「しよ、將軍っ!？」

たちまち怒りがすつとんだ。

セルフィーは、わたわたと落ちた自分の剣を拾って収め、

「あなたは將軍様……なんですか」

「ふつ……まーな。この国で知らぬ者のいない上將軍のレインとは、まさにこの俺のことだ」

さらりと髪をかきあげる男……つまり、レイン。

「え、ええゝつ」

ど、どうしよう！ 全身から血の気が引いた思いがする。

よりによって、試験を監督する立場の人に。し、しかも、この人が噂のレイン様だったなんて！

レインはミランを放置し、ひたすらあわわわしているセルフィーを上から下までジロジロ観察した。

「そう言えば、おまえは何者なんだ。俺になんか怨みでもあるのか？ 俺は女にはこの上なく甘い男だぞ。斬りつけられる覚えなんかないからな！」

「あ、そのつ。しよ、將軍の気配にぞくつとなつてその……ああつ、なに言ってるんだろ、わたし」

もどもご言つて一人で落ち込んでいると、不思議なことに、レインの顔が少しだけ和らいだ。

「ほう……おまえ、俺の『力』を感じたか。なかなか見所ありそうなヤツだな。……俺から見や、全然弱いが」

「本当ですかっ」

レインの後半のセリフは無視し、『見所ありそうなヤツ』という箇所飛びつく。セルフィーはここぞとばかりに一気にまくしたてた。

「わたし、今回の『騎士の一般公募試験』を受けに来たんですつ。ちゃんと事前に受け付けもすま

せていますっ。せ、セルフィーといって、この町の生まれです。なにがなんでも騎士になりたいんですっ。がんばりますっ」

一気に自己紹介を終えたセルフィーに、レインはぶすつと返す。

「ほお……とっぱしから順調な滑り出しじゃないか、ええっ、受験生？」

「……あう」

一時の熱情がさあつと退いた。

「そんなあ。わたし、知らなかったんです、あなたがレイン様だなんて」

人前では滅多にないことなのに、たちまちセルフィーは泣きそうになっていた。他のこと（例えば貧乏とか）なら幾らでも辛抱できるが、夢に関しては別だ。

ここで追い出されたら、自分はどうすればいいだろう……

「馬鹿、泣くな。安心しろ、別にここで落したりはしないから」

「……」

ホント？ という意味を込めて、じつと上目遣いの目で見上げると、レインはしっかりと頷いてくれた。ただし――

「だけど、俺の好感度を下げると後々災いがあるからな。そこら辺をしっかりと覚えておけよ！」
念押しされた。

「は、はいっ」

「わかればよし！ そろそろ時間だぞ。俺についてくるといい」

「はいっ、將軍！」

現金にも即元氣を取り戻し、セルフィーは背中の子袋を揺すり上げて彼の後に続いた。なんとなく、ミランという人の「とんでもない人に見込まれてまあ」という感じの視線が、ちよつと気になったけど。

城門を抜け、どんどん歩いて行くレインを、セルフィーはちよこちよこと小走りに追いかけていった。

歩幅が大幅に違うので、どうしてもそうなるのだ。が、しばらく歩くうちにレインが遅れがちなセルフィーに気付き、ゆっくりとした歩調に変えてくれた。

「はあ、はあ……ありがとうございます、將軍」

「むう――」

レインはズタ袋を背負ってよたよたと歩くセルフィーを横目で見、小さめの声で、しかし彼女にはしっかり聞こえる音量で、ぼそりと独白した。

「体力に難あり、か。……マイナス二十点」

「え、ええっ!? へ、平気ですっ。わたし、実は凄くタフなんですっ。ほら、こんなにっ」

セルフィーはあたふたと、意味もなく中庭を駆け回った。ズタ袋が背中でポンポンと弾み、土埃

が立つ。ぐるぐる駆け回った直後に息が切れて、たちまちへろへろである。へたり込んでしまった。
「ま、まだまだ走れ……はあっはあっ」

「うっとうしいからやめろっ、馬鹿っ」

怒られた。

「体力のないのが余計見え見えになるだけだ。さっきのはからっただけなんだよ、本気に取るな、本気にっ」

「そ、そんな意地悪言わないでください……。わたし、試験が迫ってて緊張してるのにい」

「馬鹿、気楽に行け、気楽に。騎士にならなくても死にやしない。だいたい——」

レインはズタ袋をボコンと小突いた。

「なにが入ってるんだ、これ。おまえの体格に合ってないぞっ」

「えっと、服とか下着とか。とにかく身の回りの生活用品です」

「やっとなち上がったセルフィーがそう言うど、」

「夜逃げじゃあるまいし……なんでそんなの持ってきてるんだよ」

「それはその——」

騎士見習いになれば、城の宿舎に泊まれる。そう思ってた用意だが、事実を話すのはどうにも気が進まなかった。

家賃が払えなくて家を追い出されたのまで、ついではれそうだからだ。それに、同情されたり

するのも嫌だった。

「……ま、いい」

幸いなことに、レインは特に追及して来なかった。

穏やかな口調になり、歩き出す。

「とにかく、可能な限り逃げ。またあいつがうるさいからな」

「は、はい」

あいつって誰だろう？

ぶしつけに訊くのもためられる。それに、どうせすぐにわかりそうだった。中庭を突っ切り、宮殿の裏手に回り込んだ二人の行く先に、新築とおぼしき真四角の建物が見えてきたのだ。

「あそこが会場なんですか」

「会場というか……あそこはちよい前に新設された闘技場だな。たまたま今日は試験会場に借りたんだ」

「ど、闘技場!？」

「いや、ちゃんとした名前は他にある。俺がけろっと忘れただけだ。本来の目的は、騎士が剣の練習とかに使う場所らしい。道場……違うな、やっぱり思い出せん」

実にアバウトなことを言うレインに、はあ、とセルフィーは曖昧に頷いた。この人は、見た目以上におおらかな人らしい。話に聞いていた年齢（二十五歳）より随分と若く見えるのも意外だった。

もつとも、今のセルフィーはそれどころではないので、すぐに試験のことで頭が一杯になった。
また新たな緊張感が生じる。

入り口付近で大勢の受験者らしき男女（圧倒的に男が多いが）が群れている。誰も彼も強者（つわもの）そう
で、セルフィーごとき「極貧栄養失調少女」は、片腕でひとひねりされそうに見えてならない。と
いうか、皆つい今し方、地下牢（ろう）から脱走してきた極悪人（ごくあくにん）のように見える。例えるなら、何十人も人
を殺した罪人のごとき面構え（つらみ）である。

想像しただけで、死ぬほど怖くなった。

「おい、なにをガチガチになってるんだ。新婚初夜に臨む花嫁じゃあるまいし、楽に行け楽に。
そつちもこつちも、怖いのは最初だけだ」

「は、はい。がんばります。さ、最初だけですわ」

レインのたわけたセリフは、半分以上セルフィーの耳を素通り（すどおり）していた。たむろする強豪達（きやうごう）をな
るべく見ないようにし、ぎくしゃくした足取りで黒い背中だけに視線（しせん）を向ける。

レインを見分けられない間抜け（まぬけ）は彼女（かのじょ）くらいなのか、受験者（けんしや）達の多くは彼（かれ）にさつと道を開け、敬
礼（れい）をした。うむ、などとエラそうに頷（うなづ）いて彼（かれ）が通る。

その後を、親（おや）にすぎる幼児（ようり）のようにセルフィーが追（お）いかけ、会場内（かいじやうない）に大急ぎで逃げ込んだ。扉（かど）の
両脇（りやうわき）に控えていた兵士（へいし）達がなにか言おうとしたが、無視（むし）した。

「はあ……。わたし、こわかったです」

安全圏（けん）に入（い）ってやつと嘆息（たんそく）する。

「おまえな……」

あきれたようなレインの声。

「は？」

「なんでおまえもついてくるんだよ！ おまえは外（ぐわい）で待つ方（かた）だろうがっ」

「ああ、そ、そうでした。で、でもっ——」

『遅（おそ）い。遅（おそ）いです、將軍（しやうぐん）っ！』

慌（あわ）てふためくセルフィーに、救（きう）いの金切り（きんぎり）声（こゑ）が割（や）って入（い）った。

だ、誰（たれ）っ!?

ぱっとそちらを見ると、金髪（きんぱつ）で碧眼（へきがん）のモロに貴族（きぞく）、しかも純潔（じゆんけつ）の貴族（きぞく）だと一発（いっぱつ）でわかる美女（びよ）が厳
しい目つきですくつきりと立（た）っていた。この国の貴族（きぞく）の血筋（けつしん）（純潔（じゆんけつ）に限（かぎ）る）は、白目（しろめ）にあたる部分（ぶぶん）ま
でうつすらと青（あお）いのですぐに見分けがつくのだ。

ピカピカに磨（こ）き上げられた銀色（ぎんしき）の鎧（よろい）で全身（しぜん）を覆（おほ）った彼女は、両足（りやうそく）を少し開（ひら）き、床（とこ）に突き立（た）てられ
た剣（さ）の鞘（さや）に両手（りやうて）を乗（の）せていた。

なまくらな弟子（でし）を前（まへ）にした怒（いか）れる師範代（しはんだい）みだが、着（き）込んでい（い）る鎧（よろい）が巨大（きゆうだい）すぎ、どうも実際（じつざい）の

威厳には乏しい。

鎧美女（とりあえずセルフイーが名付けた）の横には短く刈り込んだ金髪の、同じく貴族らしき男性が困ったような顔で立っている。こちらは平服で、さらにその瞳を見る限り、純潔の貴族というわけではなさそうだった。

「遅いっ、時間ギリギリですっ。上將軍ともあろう方が、そのようなことでは内外に示しがつかないではありませんか！」

顔に似合った厳しい声音で、鎧美女はぎゃんぎゃん喚く。

レインはうんざりした様子で一瞥し、心底嫌そうに言った。

「おまえは、ほんつとに進歩がないな」

「なんですとっ」

険悪なムードなのを察してセルフイーは、

「あの。ではわたし、外の受験生達の所へ行きますね」

「どうせもうすぐ入ってもらうんだ。もうここにいろ。……例えばキンチョでも、女が近くにいろのは悪い気分じゃないしな」

「そ、そうですかつ」

なんか、むちゃくちゃ失礼な言い草のような気がする。多分、この人は敵が多いだろうなあとセ

ルフイーは思う。なぜか彼女自身はあまり腹が立たないのだが。それは、レインの功績を知っているのと、その強さを実際に目の当たりにしたからかもしれない。

あれだけの実力を身につけるには、さぞかし苦しい努力も積み上げていると思うのだ。

「おい……」

そのレインは鎧美女の前に立つと、つま先でその鎧の足をコツンと蹴飛ばした。

「その恰好はよせと言ったろ、セノア！」

「け、蹴らないでください。無礼ではありませんかつ」

「無礼もクソもあるか。即刻、脱げっ」

「その言い方、どこか卑猥ですねえ」

もう一人の若者がのんびりと口を挟む。

あまりにくだらない内容のせいか、双方から無視された。

「だいたいだな——」

レインは、セノアと呼んだ女性にズケズケと、

「その恰好で歩けるのか、えっ？」

「も、もちろんですとも！ 歩けなくてどうします……」

「最後の方、声が小さくなったぞ、こらっ。試しにちよっと歩いてみる」

「なんでそんなことを」

「嫌だと言うなら、その鎧をまっぴらにしてやる！」

魔劍の柄に手をかけ、レインが恫喝を加える。この人なら本当にやるかもしれないとセルフィーは思ったが、セノアもそう考えたようで顔色が変わった。

「冗談ではないです！ この鎧は、我がエスターハート家伝来の——」

「いいから、歩けつての！」

「わ、わかりました。いいでしょう、歩きますよ。なんでもないことですからね」

セノアは、何かを覚悟するように大きく息を吸ってから、ゆっくりと足を持ち上げて歩を進めた。一見、「楽々歩いてますよ、私は」という表情なものの、五歩も歩かないウチに白い額にびっしり汗をかき始めたので、真実は明らかである。

無理になんともない顔をしようとするので、かえって笑える。レインの前を通り過ぎる時には、もう呼吸が乱れていた。

「おっと、足がすべった」

突然。レインがそこへ、ひよいとばかりに足を出す。

「ああっ!？」

騒々しい音を立て、金属の固まりが床に倒れ込んだ。

「なにすんですかあつ。今日という今日は許しませんよつ。名誉ある上級騎士の私にこんな恥をかかせて——」

ジタバタするのはいいが、セノアはどうも立てないらしかった。無闇やたらと、手足で床を叩いているだけである。やかましいだけで、起きあがることすら出来ない。セルフィーのいるところ、鎧のサイズが大きすぎ、かつ重すぎたのが敗因だろう。

「ううつ。た、立てない……」

あっちへゴロゴロこっちへゴロゴロしつつ、なんとか立とうともがくセノア。

そんな彼女に目を落しながら、レインは吐息混じりに、

「おいレニ。……こいつの鎧、さっさと引つpegせ」

「りよ、了解ですつ」

傍らに立っていた若者……レニは、笑いを堪えているせいか、真つ赤な顔をしていた。

もがくセノアからなんとか鎧をはがすことに成功し、やっと彼女は立ち上がることが出来た。無理もないが、もの凄く怒っている。せっかく綺麗なのに惜しいなあとセルフィーは思う。

「受験者に威厳を示そうと、わざわざ用意してきましたのに」

怨みがましい声でブツブツ言うセノア。

レインは情け容赦なく、

「馬鹿たれ！ 着込んで動けなくなるような鎧が役に立つか。いい加減で自分の力量を知れ。愚か

者、甲斐性なし」

「うっ……そこまで言わなくても」

セノアは傷ついたように視線を泳がせ……セルフィーに目を止めた。

「先ほどから気になっていましたが、この女性は誰ですっ」
いきなり八つ当たりされた。

「わ、わたしですか」

「ああ、こいつは——」

レインはめんどくさそうに、

「さっき城門で出会ったセルフィーとかいう名の受験者だ。騎士になりたいんだと」

「受験者なら、外で待機しているはずでしょう。なぜここにいるのですっ」

不機嫌丸出しの声でセノアが追及する。セルフィーは思わずあやまりかけたが、先にレインが蠅でも追うように手を振った。

「まあ、女がそばにいますと場が華やぐからな。それに、どうせもう時間だろう」

「そうそう。自分も可愛らしいお嬢さんがそばにいることに異存はありません」

レニが熱心に賛同した。同時に、セルフィーにこっと笑いかけてきた。お返しに微笑み返したけれど、絶対引きつった笑顔になっていると思う。

「レニ殿！ それは問題発言でしょう」

「よせって！」

レインはセノアを制し、

「もう時間なんだから、ささっと終わらせて昼飯にするぞ。——おいっ」

声を張り上げ、戸口で控えた兵士二人に入れろと合図した。

『はっ』

敬礼を返した兵士達の手で扉が大きく開かれ、どつと受験者が入って来る。

「よし、おまえも向こうに行ってる、セルフィー」

「は、はいっ」

言われ、早くもガチガチのセルフィーは、受験者達の方へ戻った。

「おおざっぱでいいから、四列くらいに並べ」

レインのやる気なさげな声に従い、百人近い受験者が列を作る。一番うしろに並ぼうとしたセルフィーは人混みに揉まれ、気付いた時にはなぜか列の一番前にいた。レイン達から数歩くらいしか離れていない。

ひい、き、緊張するよ。

勝ち抜き戦だと言われたらどうしよう。

まだなにも始まっていないウチから、もう汗だくである。

なにしろ、夢がかかっているだけではない。生活もかかっているので緊張せざるを得ない。

試験に失敗して宿舎に泊まる目算が崩れ、橋の下辺りで夜を明かす自分の姿が目の前にちらつくで、モノの十日もしないうちに、夜の仕事を落ちぶれたりしているわけだ……いや、今でもかなり落ちぶれているが。

『あの、私を一晚買ってくださいませんか』

こんなの、絶対にいや。

あ、でも、こんなやせっぱちの女の子ではそれもままならないかも。

ああ、なに考えてるんだろう、わたしっ。

と、とにかく勝ち抜き戦だけは止めてほしいです……怖いから。

セルフィーが秘かにそう願っていた時。

レニがレインに向かって、

「やつぱり、ここは勝ち抜き戦で決めますか、將軍」

この人、嫌い。嫌いですっ。

理不尽な怒りが燃えさかる。

しかし幸いなことに、レインがあっさり却下した。

「いや、そんな面倒なことやってられるか、昼飯も近いのに」

ほっと肩の力が抜けた。

將軍、セルフィーはあなたにどこまでもついていきます。

今だけかもしれないが、本気でそう思えた。

尊敬と感謝の視線を捧げる少女にはまるで無頓着に、レインはざっと受験生を見渡して眉根を寄せた。

「うわ、ほとんどむさ苦しい男ばっか。これは早く終わらせるに限るなあ」

「お待ちください、將軍！」

氣力を削ぐ発言で弛緩した空気が、またピリリと緊張した。

セノアが紅潮した頬で割り込む。

「その前に、彼らに私から一言だけ言わせてくださいませんか」

「まあ……どうしても言うのなら、言わせてやらんこともないが」

言外に「遠慮しろ、馬鹿」と言いたそうなレインの表情を見もせず、セノアはすぐに「ではっ」と言ってお口を開いた。

「聞けっ、諸君！」

甲高い声でまず一喝する。

受験生達が反射的に氣を付けの姿勢をとるのを確認してから、セノアは得々と演説を始めた。

『今、我が祖国サンクワールは未曾有の危機にあるっ。大陸北部地方の強国、につつきあのザーマ

インの侵攻は、まだ先月のことに過ぎない。前回は辛くも退けたが、もしまた同様の侵攻があれば、国の要たる我々騎士が最前線に立たねばならないのは明らかであるっ』

どかが一言なんでしょうか、とセルフイーは疑問を覚えたが、セノアはいよいよ赤い顔して（興奮しているらしい）、さらに舌の滑りがよくなった。

『敵のレイグル王は、既に多くの兵士を徵募して軍に補充し、着々と体制を立て直しつつあるという。それが新たな戦いの準備に相違ないことは言うまでもない。故に！我々としても大いに軍の増強を計り、敵の侵攻に対処すべくここに騎士登用のがぼっ』

突然だった。

モノも言わずにレインが金髪美女の頭を、魔剣ごと鞘でぶっ叩いたのだ。たまらず両手で頭を押さえ、その場にしゃがみ込むセノア。

「い、痛い……」

余程傷むのか、碧眼が涙で光っていた。

「当たり前だ、あほうっ。一言だと言ったろ。長い話をおっぱじめるんじゃない」

「うう、こぶが……。もうちょっとで終わるところだったのですよ！それを！」

「駄目だ。俺の昼飯をこれ以上遅らせるのは我慢ならん」

頭の中の八割くらいが昼飯で一杯になっているようで、レインはもうセノアを省みもせず、とまどう受験生達に命じた。

「みんな、手持ちの武器を構えて、俺の方を向け！構え方は好きずきでいい」

ガチャガチャガチャ

混乱した表情で、全員が武器を抜いた。互いに距離を取り、言われた通りにレインに向かって正眼でかまえる。中には大上段にバトルアックスを構える剛の者もいた。

レインは一渡り眺め、

「うむ。そんなもんでいい。で、ここから試験だ」

さっと緊張が走る。

中古の剣を手にするセルフイーも、もちろん緊張していた。

まさか、一斉にかかってこいとか？

ところがレインは、

「俺をサンクワールの上將軍と思うな。憎い憎い敵だと思え！一瞬後には斬りつけるつもりで気合いを入れて見る！さ、はじめっ」

なんじゃ、そりゃああつ！

おそらく、声にすればそんな内容の、無言の抗議がその場を覆い尽くした（ような気がした）。素直なセルフイーでさえ、それでみんなが納得するのだろうか、と思った。

一定レベル以上の実力者から、ある種の力の波動を感じることにについては、セルフィーもとうに気付いている。レインの意図するところは、まさにそこなのだろうと思うけど――

それでいいの……ほんとに？

わたした的には、怖くない分、嬉しいかも。

「おい、やる気のないヤツはとっとと帰れ。さっさと始めろ、さっさと！」

一番やる気のなさそうな当人のくせして、レインは「文句あるか！」とばかりに受験生の群れに、そして今にも抗議しそうな顔の部下二人に、ぐぐつと睨みをくれていく。

一人だけ、ごついバトルアックスの巨漢がむつとした表情で前に出かけたが、結局思い直したのかまた元の位置に戻った。

他にも、ささやかな不平不満を漏らす声がさざ波のように広がり、そして尻すぼみに消えていく。馬鹿らしいが、まあ付き合ってやるか……皆そんな表情で改めて武器を持ち直す。

「よし、サクサク始めろ、サクサク。いいか、一瞬後には斬りかかるつもりで気合いを入れるんだぞ。後がないと思えっ。斬りかからなきゃ、俺に殺される……そう思うんだ」

鋭いモノを含んだ口調に、少しだけ空気が引き締まった。しん、と場内が静まりかえる。セルフィーはとうに気合いを入れ始めていた。唇をぐつと結び、あらん限りの気合いを入れ、大きな瞳をすつと細める。

この人は敵、倒すべき敵よ！

途端に、周囲のざわめきが耳から遠ざかった。

感覚がとぎすまされていく。周りに受験生達がひしめいているのを忘れ、自分のただならぬ境遇（つまり宿無し）すら頭の中からすつぽりと抜け落ちた。いつでも剣を振るえるように柄を握る手にはさほど力を込めず、視線は片時も敵の姿から外さない。無意識の内に、左足をやや引いていたもう、いつでも踏み込める。

その時、確かに見えない何かが、敵――すなわちレインに伝わったのかもしれない。

リラックスした姿勢で受験生を眺めていた彼が、誰かに声をかけられたかのように頭を巡らせ、セルフィーと視線を結んだ。

ほお？ という目で、唇の端をつり上げる。

それは、噂に聞いていた以上にふてぶてしく不敵な笑い方だった。

そして、いきなりの反撃っ。

それこそ思いつきり豪快なのが来た！

どんっ!!

そんな風圧を感じたように思う。もちろん、現実には風が吹いたわけではない。しかし、暴風のごとき圧力を感じ取ったのは事実だ。

顔中から一氣に汗が噴き出す……なぜかレインが、そびえ立つような巨人に見える。その強大な相手が、がっちりと視線を捉えてきた。目が離せない。怖いほど澄んでいて、しかもこちらの心底まで見通しそうな真つ黒な瞳。今やその瞳が、視界の全てを占めている。

普通の人間がゆっくりと登る道をとうに越えてしまった男が、真つ直ぐにセルフィーを見つめていた。自分が今相手にしているのは、人間以上の境地に達した存在なのだと思い知らされた。おそらく相手は本気ではなく、遊び半分でちよつと自らの『力』を闘気に籠めただけだと思う。なにしろ魔剣に手を触れさえしていないのだから。

『さあ、これから斬りかかるぞ……用意はいいか？』

そんな風に、戦う直前の状態に自らの意識を高めてみせただけなのだろう。

まるで本気ではない。子犬にじゃれつかれた人間が、ちよつと相手をしてやったようなものだ。そのくらいは見当がつく。

それでも――

この時確かに、セルフィーはレインの力的一端に触れたのだった。

足下が頼りなくなり、知らず知らずのうちに後退つてしまっている。相手の闘気はこちらの気力を吹き飛ばし、最後に残つた意地すらも砕きかけていた。剣先が揺れている……小刻みに、主人の動揺をそのまま映したように。圧倒的な不可視の力に圧迫され、膝も震え出した。場内の何力所か

で足摺あしずりのような音がした。他にもレインの力を感じた者が幾人かいるらしい。怖じ気づいて、姿勢を崩した者が。

もう駄目つ、絶対に床にへたりこんじゃう！

耐えきれずにセルフィーが悲鳴を上げかけた時、唐突にレインは視線を外した。

全身を圧していたプレッシャーが、すうつと勢いを減じる。

何事もなかったように、レインが号令。

「よし、そこまで。試験終了だ」

がつくりと膝をついた。

つかずにいられなかった。

気が抜けたように吐息を漏らす者がほとんどの場内で、セルフィーは激しく呼吸を乱している。同様の者が、あと数人くらいいたようだが、確認する気力もない。

本当に殺されるかと思つた。

「あゝ、それでは即合格者の発表をするからな。まず、セルフィー」

「ふえっ!？」

「いや……ふえつ、じゃなくて、おまえだよ。またパンツが見えているぞ？」
ええっ!？」

蹴飛ばされたように立ち上がった。

「嘘だ。やっと正気に戻ったか」

レインはもうセルフイーには目もくれず、「あゝ、それから二列目の前から二番目と、あとは――」などと、どんどん合格者を指名している。そのほとんどは、セルフイーと同じく汗だくで床にへばっている者達だった。

じわじわと喜びが込み上げてきた。

これまでの緊張はどこ吹く風、騎士になる夢が叶いそうになったことに素直に感動する。最初は騎士見習いからに決まっているが、それでもつい先ほどまでに比べれば、格段の進歩だ。それこそ一氣に道が開けた気がする。

ただちよつと気になるのは、自分なんか合格でいいのか、ということだが。だって、全然相手にもならなかったのに。

「――と、ここまで。あとは残念ながら失格だな」

合格者指名の声が止んだ。

固唾^{かたず}を呑んでいた受験生の多くは、声にならない悲鳴を上げていた。受験方法に、納得いかない者がほとんどなのだろう。

このままでは――

『おいつ、それはねーだろうっ』

あ、やっぱり不満が出た。

その不満の主はさつきも文句を言いそうだったバトルアックスの大男で、列から抜け出し、のしのしと前へ出た。

間近から、レインをぎんつと睨^{にら}む。

長身のレインよりまだ頭一つ分は高く、加えて横幅はもう問題にならないほど差がある。年季の入った革製ベストの下で、くつきりと割れた筋肉の山が存在を主張している。

なんか汗くさそうです。

悪いとは思ったが、それがセルフイーの感想である。

レインが傍目^{はため}にもわかるほどうつとうしそうな顔でピツと大男を指差し、

「なんだこれは？」

隣のレニに訊いた。

大男がくわつと目を剥いた。怒っている、むしろくちや怒っている。

訊かれたレニは、手に持った名簿らしき紙切れにアセアセと目を落としていた。セルフイーはそれらの誰よりも先に反応した……が、まだ足が震えているので、実際の行動としては老婆のように前へよろばい出た。

「あのっ。將軍様にお尋ねしたいことがありますっ」

「なんだよ。おまえは合格だっていうのに、それがなんか不満なのか。落とされた方がいいのか」
今にも手が出そうな横目を使われた。

「まさか！ 不満なんてありません。ただですね」

「ただ、なんだ？」

「……わたしは、將軍様に全く齒が立ちませんでした。それなのに、どうして合格出来たのでしょうか」
う」

「おまえなあ」

レインは救いたい低能を見るような目つきをした。

「とりあえず、その『將軍様』をやめろ」

最初に釘を刺し、続ける。

「おまえ、俺と向き合ってどう思った？」

「ええつ。將軍さ——いえ、將軍のことですかあ。そのお……」

セルフィーはやりとりに聞き耳を立てているセノア達や、事態の急な展開についていけずにポカ
ンとしている抗議男を順繰りに見やり、ごくごく小さな声で返した。

「その、將軍は精悍せいかんなお顔でなかなかハンサムだと思いますけど、わたしとしてはもう少し優しい
感じのお兄さんタイプが好きなので——きゃんっ」

ガンッ

鞘さや（魔劍入り）で頭をぶつ叩かれた。

目から盛大に星が飛ぶ。さっきのセノアの気持ちが存在にわかった。頭が割れたかと思ったほど
で、セルフィーは祈りを捧げる修道女のような姿勢でへたへたと床に両膝をついた。どこが「この
上なく女に甘い」のだろうか。全然話が違っでは。

「……とつても……痛いです」

文字通り、声を絞り出した。

「当たり前だつ。誰がおまえの好感度を訊きいてるんだよつ。なにが優しいお兄さんだ、厚かまし
いっ。だいたい、俺だつておまえみたいなガキンチョはお断りだつ」

わたし、もう十七歳なんですけど。

なんとかそれだけ言えた。まだ頭がガンガンして、それ以上は声にならない。

「十七じゃ、俺から見ちゃ十分ガキンチョだろうが。そうじゃなくて！ さっきの见えないやりと
りの話だ。あれについて訊きいてるんだ！」

「あ、それなら——」

さらなる回復を待ち、

「凄すごいと思いましたっ。強いのは知っていましたが、でも、あれほどの『力』を感じるなんて！

將軍は、絶対自分で言う以上に強い人です！」

「……ふっ」

目に見えてレインの機嫌が回復した。
ひとしきり髪をかきあげてから、除け者にされていた筋肉ムキムキの抗議男を指差す。
「つまり、それが理由だ。おまえはまだまだ弱いが、少なくとも相手の力量を読みとることは出来た。けど、この汗くさい男は全然っ、わかってない。だからおまえが合格でこいつは落第なわけだ。理解したか？」

……そう言われると、そうかも。

レインの闘気を感じることが出来たのは、それはそれでポイントには違いない。

「……なんかとっても納得できたかも」

「納得できるわけねーだろっ」

コクコク頷いたセルフィーを見て、夢から醒めたように抗議男が喚いた。

レニが今頃になって紙面から顔を上げ、

「あ、將軍、見つけましたよ！ この人の名前は」

「んなの、どうだっていい！」

せっかくの努力を一蹴するレイン。

男にガンを飛ばし、唇を歪める。

「俺の試験方法に随分と不満みたいだな」

「つたりめーだっ。あんなわけわからん方法で誰が納得する、えっ？」

大男は太い眉毛を怒らせて吠え立てた。まだ場内に残っていた元受験生達も、何人もが遠巻きにして秘かに頷いていた。

「第一、どう考えたってそのガキより俺の方が強いに決まってるだろっ」

ぶんっ、とバトルアックスをセルフィーに突き付け、男は胸を反らした。胸筋がベスト越しに凶悪に盛り上がる。今にもボタンがはじけ飛びそうだ。

「ひっ」

怖さというよりおぞましきから、セルフィーは後退した。

「げっ……醜い。どこでも必ずいるんだよなあ、こういうヤツ」

レインもまた、顔をしかめて男と距離を取る。

「これまで馬鹿力だけで世の中渡ってきて、なまじそれでなんとかなったものだから、これからもそれで通そうと思ってるヤツ。自分が弱いことを自覚してないってのは、始末に負えん」

「な、なんだとうっ」

レインは怒声を涼しい顔で聞き流し、ニッとふてぶてしく笑った。

「おまえが嫌でも納得できるようにしてやろう。今から俺がぶん殴りに行くから、見事防いでみろ。避けるなり殴り返すなりが出来たら、騎士でも將軍にでもしてやるさ。それで文句あるまい！」

「なにっ。……ホントか!?」

「無論だ。だいたい、おまえごときに手こずっていて將軍なんか務まるか！ 心おきなく反撃す

りやいいさ」

おまえごとき、という部分であからさまにむつとした名無しの筋肉男だが、レインの申し出を咀嚼するウチに相好を崩した。無精髭の生えた顎をさすり、きひひ、と下品に笑う。早くも脳裏では、上將軍を倒して後釜に座った自分の栄光の姿が、ありありと映っているのかもしれない。

セルフィーも、半時間前ならレインが叩きのめされる姿を想像したかもしれないが、今は意見が異なる。

わかってないのだ、この人は。

「おめー、後悔するぜ。ガッハッハ！」

バトルアックスを腰に戻し、男が天井を吹き飛ばす勢いで豪快に笑う。言葉遣いがすっかり対等になっているのは、この後の結果を疑っていないからだろう。

レニが、牛肉にされる運命の牛を見るような目で男を眺め、セノアは止めようかどうか迷っているようだった。

肝心のレイン本人は、男と一緒に笑っていた。

「ハッハッハ！」

合唱するかのように声を揃えて笑い、途中でふつと表情を消した。

「で、用意はいいか」

「おう、いつでもいいぜ。かかって来い」

そう言った次の瞬間――

「ブッ!？」

男は鼻血を噴きながら宙を飛び、右手の壁に巨体を叩き付けられた。本当に十メートルくらい飛んだかもしれない。

男の体重を考えれば有り得ないが、目の前で起こったのだからしょうがない。

最初からじつと見つめていたセルフィーでさえ、レインの動きを把握できなかった。ただ、城門の時のように微風が起こり、近くにいたセルフィーの前髪をふわっと持ち上げた。

そして黒い残像が一瞬だけ見え、ずららつと連なつて消えた。

それだけ。

わっ、と思った時にはもう、大男は床にうつ伏せになって痙攣していた。全然動かない。というか、すっ飛んだ距離からして当分目を覚まさないような。

「……弱すぎて話にもならないな。やっぱり失格」

持ち上げた拳を下ろし、レインがからりと言う。おかげでやっとセルフィーにも、「あ、そうか、殴ったんだ」と理解できた。それまでは動きが速すぎて、レインがなにをしたのかさっぱりだったのだ。

「――それで？」

レインは見物していた元受験生にさうと視線を走らせる。

「他に誰か不満のある者は？ 抗議ならいつでも受け付けるぞ」

反応は素早^{すばや}かった。皆が一斉に首を振った。合格した者まで振っていた。

「わかればよし。では、試験はこれでつつがなく終わりだ」

レインがエラそうに総括する。

とその時、綺麗なソプラノの音が響いた。

「レイン！」

とても嬉しそうな少女の歓声が、静まりかえった場内に響いた。

えっ。

声のした方……背後の正面入り口ではなく、右手の壁にある小さな出口に一人の少女がぴよこつと顔を出し、見つけたと言わんばかりの笑顔を見せていた。

なんて……美しい……

感動のあまり合格の喜びさえ、一時吹っ飛んだ。

一瞬言葉を失うほど、容姿の整った少女だった。わずかなくすみもない見事な金髪がまっすぐに腰まで伸び、貴族の特徴を示す真っ青な瞳はうらやましくなるくらい大きくて愛らしい。

さらに、優しい形をした眉やくっきりした鼻梁^{びりよう}に白磁^{はくじ}の肌など、神に特別^{ひい}贖^いされているとしか思えない。

過去、なんども「可愛いね」と誉められたことのあるセルフイーなのに、この少女の前では自分

など、月と太陽ほどに差がありそうな気がする。

どれほどの麗人^{れいじん}でも、その気になれば次々と欠点をあげつらうことが可能なものだが、この子に關してはお手上げだった。まさに完璧である。

こんな綺麗な女の子がいるんだ……セルフイーはほれぼれと見惚^{みほ}れた。自分が男だったら危なかつたと思う。一目惚^{ひとめぼ}れしてしまったかも。

その少女は、足下^{あしもと}に転がっている汗くさい筋肉男に気付いた様子もなく、レインを見てはあつと顔を輝かせていた。

もしかすると、セルフイーを含めた大勢の見物人ですら目に入っていないのかもしれない。それくらい一途^{いちず}な瞳でレインだけを見ている。

彼女はすぐに、レイン目指してとととと駆け出す。とてもとても嬉しそうな表情で。

謎の美少女の正体はすぐに割れた。

セノアとレニが恭しく一礼し、レインが友達に声をかけるような気安さでこう言ったのだ。

「やあ、姫様」

ええ———!?

水面に広がる波紋のように、見物人達に動揺が広がった。

このサンクワールで姫様と呼ばれそうな人物は一人しかいない。すなわち、次期国王と目されている、シェルファ王女である。近々戴冠^{たいかん}式が予定されており、その式典が済めば、名実ともに国王

ということになるだろう。いや、今だってもう国王みたいなものだ。

サンクワールでは、親から子へと王位が受け継がれるのが原則である。

王族と呼ばれる貴族はそこそ数がいるのだが、この基本原則からすると、彼女が次期王となるのが当然なのだ。

へへえーっ!!

今にもそんな声が聞こえそうな態度で、皆その場に片膝をついた。まあ、王女など雲上人だし、主君というわけでもないのだけれど、これは国主に対する礼儀というものである。

どうということかという上、上將軍レイン旗下の騎士見習いであるセルフイーの主君とはあくまでもレインであり、シェルファ王女ではない。

これは、シェルファが王になっても変わらない。他の国ではいざ知らず、この国では騎士は自分の仕える領主こそが主君で、セルフイーの真の主君はレインになる。極端な話、レインが「シェルファを打倒して、いっちょ俺がこの国の王になるぜ、ガッハッハ!」と言いつけば、セルフイー達騎士はその方針に従うのが一応の基本なのだ。

レインがシェルファに仕える騎士だとしても、セルフイーから見ればそういうことなのである。彼が彼女の臣下だから、セルフイーの主君もシェルファ、とはならない。

ややこしいことだが、この国における王とは、(血筋は当然として)国内最大最強勢力を保持す

る領主のことである、と言えなくもない。

とはいえ、そんな面倒な図式はあくまで建前上の原則であって、やっぱり次期国王は次期国王。礼を尽くすのは当然である。

片膝をつくどころか、気分的には床板に額をこすりつけたいくらいだ。なにしろ、つい数分前まで宿無しの庶民だったことだし。

そういうわけで、セルフイーも皆に習って大焦りで膝をつこうとしたのだが――。間抜けなことにまだ足のふらつきが完全に回復していなかったので、バランスを崩してこてん、と倒れてしまう。当然、またしてもスカートが派手にめくれた。

レインはすかさずさつと目をやり、失礼にも「もう飽きたなあ」とコメントした。加えて、

「さつきから見ていると……おまえはアレか、定期的に下着を見せんと、辛抱たまらん性癖でもあるわけか?」

絶対に顔が真っ赤になったと思う。

「そ、そんなわけじゃないんですかつ。だいたい、いるんですかそんな人っ」

あっさりとレイン。

いや、そう言われると。

勢いを削^そがれ、セルフィーはバツの悪い顔で改めて膝をついた。頭をさげて王女に赤面した顔を見せないようにする。でも、こっそり上目遣いで二人の様子だけは窺^{うかが}っておく。……王族を目にする機会などかつてなかったので、興味津津^{しんしん}なのだ。

王女は「まあ」という風に小さな手を口元にやり、目を丸くしていた。どうやら本当にセルフィー達に気付いていなかったらしい。

「あの……お邪魔でしたか、レイン」

そっとレインの背中に隠れる素振^{そぶ}りを見せた。内気な性格の王女なのかもしれない。

「なに、もう終わった所です。今日は騎士の一般公募試験をやったんですよ」

「そうですか。それで……あそこに倒れている方は？」

これまた今になって、王女は向こうでぶっ倒れている男をおずおずと見やった。

床とキスしているデカい顔の下で、じわじわと流れた鼻血が、面積を拡大している。……悲惨な光景だった。

「ああ、彼ですね」

レインはしれっとした態度でため息をついた。

「あいつは、図体の割に神経の細い受験生でして。試験中に緊張に耐えられなくなって、鼻血噴^ふいて気絶しちまったんですよ。いやあ、向いてなかったんですなあ……気の毒ですが失格でした。残

念ですね。ま、意気込みだけはありませんが」

こ、この人はっ。

そこはかとなく非難の視線が集中したが、レインはしれっとした表情を崩さない。

「姫様こそ、なにかご用件でも」

「いえ、ただレインとお話したくて」

にこっと微笑む。

そのあまりの美しさに、またセルフィーは感動を覚えた。とてもきれい……でも、なんて堂々と好意を見せる人なんでしょう。うらやましいかも。

「あ、でもそう言えば」

王女が思いだしたように、

「ラルファスさまがレインを探していたようすわ」

なんでラルファス様だけ「さま付け」なんでしょうか。

セルフィーは、またすぐに思った。ラルファスという人がレインと同僚^{じょうしやく}の上将軍であることは知っている。というか、知らない者はまずいない。王族と関係の深い、筆頭貴族の一人だからだ。ただ、そうはいっても、あくまでも臣下^{しんか}である彼を丁寧^{ていねい}に呼ぶのは王女様の性格故^{ゆえ}だろうけど、なぜレイン將軍の方は呼び捨てなんでしょうか。

以上の点を一言でまとめると「この二人は怪しいです」という所に落ち着くのだが、セルフィー

はそこまで意地の悪いことは思わず、ただ、「主君とうまくいつてる人の下について良かった」と安心してた。これなら、末永く正騎士として（今はまだ見習いだが）レインの下で働けるだろう……

とにかく、この時はそう思ったのだ。

後に、彼女は自分の甘い見通しを思い出して滯沲することになる。

ともあれ、レインは王女の言葉を聞き、

「あいつが呼んでいる？ ははあ」

一人で納得したように頷いた。すぐに部下二人に「おい、後は任せた」と言い置き、王女と一緒に立ち去ろうとする。なぜか怒った顔のセノア、うらやましそうなレニ、そんな部下二人が軽く低頭した。

そこに至り、やっとセルフィーは、自分の追いつめられた状況を思い出した。

黒い背中を大慌てで呼び止める。

「あのっ、將軍！」

「なんだ？」

振り返った主従二人に見つめられて、セルフィーはまた頬が熱くなった。よく考えたら、自分の主君たる將軍に尋ねるようなことではない。

「あの……」

「どうした、早く言え」

「はい。ええと……宿舎って今日からすぐに入れますか」

「……それを俺に訊くか、おまえは」

やっぱり言われた。

「なかなか図太い神経してんな」

追い打ちまで食らった。

「す、すみません」

「あのさ、騎士見習いの宿舎なら、ややこしい手続きとかあつて、入れるのは最低でも五日後くらいだよ」

優しいそうなお兄さんであるレニが、横から教えてくれた。初めからこの人に訊けばよかったのである。

「あ、そうですか」

コクコク頷いたものの。

セルフィーは泣きそうになっていた。注目浴びて恥ずかしいし、それに、五日後までどこで過ごしたらいいのだろうか。手持ちの全財産は銅貨数枚……食事一回分しかないでは。

これはいよいよ橋の下かと覚悟を決めかけた時、レインがぶつきらぼうに言った。

「いいぞ」

「えっ」

「今日から泊まればいい。特例として認めてやる」

ホントですかっ。

セルフィーが喜びの声を上げる前に、セノアが食ってかかった。

「將軍！ そういう事を簡単におっしゃっては困りますっ。他の者への示しが見つからないではありませんかっ」

「これだからお嬢様育ちはイヤだ」

唇を歪めてぼやくレイン。

「文句あるヤツは俺の下から黙って去ればいい、止めやしないぞ。だいたいだな」
わざとらしくふんぞり返る。

「俺の部隊では俺が掟だ！」

「しかし——」

「やかましいっ。……レニ、こいつが宿舎に入れるように手続きしてやっといてくれ」

「はいはい、お任せくださいな」

にこやかにレニが頷く。

心の底からほっとした。食事の方はパンの切れ端でもかじってなんとかするとしても、寝る場所

だけはどうにもならない。有り難かった。

「まあ、しつかりやれ」

などと、安堵したセルフィーの肩をレインがポンと叩く。そこで他の者には聞こえないように囁かれた。

「荷物置いたら、後で俺の部屋へ来い」

えっ。ぱっと見返したが、もうレインは王女を促し、何事もなかったように歩き去っていた。
後で部屋へって……なんででしょうか。

もはやセルフィーの顔色は完熟リングゴみたいになっていた。

ま、まさか……ね。

そういう意味じゃないですよね……

第二章 王女暗殺



陽光の下へ出て閑散とした王宮の裏手を歩き始めると、レインはすぐに足を止めて誰にともなく声をかけた。

「ご苦労だった」

「えっ」

そおくとレインと腕を組もうとしていたシエルファは、慌てて手を引っ込めた。いつの間にか、誰かがこつちを見ている。

城壁のそばに等間隔で植えられた木立の影から、陽炎のようにゆらりと登場したらしい。

黒いマントをばさりとさばき、優雅に一礼などした。

見覚えがあつた。先の戦いのおり、レインの近くに影のようにはべっていた男である。いつも不機嫌そうな顔をした人だったが、今もまた、なにがそんなに気に入らないのか眉間に深々と縦皺を寄せていた。笑ってさえいれればかなり見栄えのする青年のはずだが、殷懃かつ渋い顔つきのせいだ。だいぶ損をしている（と思う）。

確か、名前はギウンター・ヴァロアといったはず……記憶力のいいシエルファは、下の名前まで正確に思い出した。

それにしても神出鬼没な人である。

「変わりは？」

不審を覚えるシエルファと違い、レインはまるで待っていたかのように問いを発した。

「ごさいません」

そう答えた後、ただ、とギウンターは語尾を濁した。

「うん？」

「怪しい気配を一度ならず感じました。よもやとは思いますが、既に侵入されている可能性もあるかと」

「ふむ。今月の警護はラルファスの担当だが、あいつは手を抜くような男じゃない。向こうが手慣れてるんだろう。おまえにまだシッポを掴ませない用心深さといい、でかいバックが背後にいるな」

「はっ。お考えの通りと拝察……」

レインは少しだけ沈思し、すぐに頷いた。

「わかった。ここからは俺がついている。おまえは調査に専念してくれ」

「はっ」

シエルファの記憶ではおそろしく愛想の無かったギウンターではあるが、レインに対してはひどく素直だった。一言の質問も返さず、再度恭しく一礼した。

「あの」

そこでどうしても辛抱できなくなり、シエルファは口を挟んだ。

「レイン、なんのお話でしょうか？」

「ああ、悪い。チビにとっちゃ、ちんぷんかんぷんだったよな」

はい、と返してからはっとした。

ここにはギウンターもいるのに、レインは忘れているのだろうか。他の人がいる前では一応言葉遣いに気を付けると言ったのは、レインの方なのに。

「いや、こいつはいいんだ」

顔色で察したのか、レインはぽふつとシエルファの頭を叩いて破顔した。

「こいつは例外中の例外だな。ちゃんとその辺の事情は知ってる。お互い、隠し事はなしにしようって古い約束もあるし」

レインがそう言うと、ギウンターは唇に極微かな、それこそ気を付けて見ていないと見落としそうな淡い笑みを見せた。すぐに消えてしまったが、シエルファはこの青年が微笑むのを初めて見た。その時、きゅんと胸が痛んだ。馬鹿げたことだと自分でも思うが、彼に軽い嫉妬を覚えたらしい。かつてのシエルファは、人との関わりを完全に捨てていたのでそういう感情とは無縁でいられたが、レインを知ってからはずもいかなくなっている。最近はその自分にとまどってばかりだ。

「……あつ」

いつの間にか、レインとギュンターの二人が自分をじっと見ていた。

「安心しろ」

くしゃっとレインがシエルファの髪をかきませた。

「男と恋愛する気はない」

「あ、あのっ」

慌てるシエルファに、レインはこだわりのない微笑みを見せる。

「しかし、おまえはモロに顔に出るな。もう少し抑えろよ。君主という仕事は、いけ好かないやつを前にしても時に笑ってないといかんからなあ」

「はい……心しておきます」

なんとなく謝りながらも、レインに髪を撫でられているとたちまち嬉しくて幸せ一杯になってしまふ。わたしは気難しい女の子だ、と思っていたのが今や遠い過去だった。

二人でその場を離れてから、もう一度シエルファが振り返ると、ギュンターはまだ残っていて頭を下げていた。

二人の間にながったかは知らないにせよ、ギュンターがレインを深く尊敬していることは間違いないようだ。

ギュンターという人は「いい人」だ。

シエルファは内心でそう結論付けた。城内で閉鎖的な生活を送っていたシエルファにとり、世界

にはいい人と悪い人、それに知らない人しかおらず、レインを尊敬する彼はもちろん「いい人」に決まっているのだった。

実は、いい人の上にはまだ、好きな人を飛ばして（いないため）「大好きな人」という段階があったりするが、そのポジションはシエルファ基準ではもう満員であり、今後増える予定も減る予定も絶対ない。

ちなみに、その定員は一人である。

「で、さっきのギュンターだけだな」

「はい」

「実は昨日からずっとおまえについていたんだ」

「……え？」

一瞬、足がとまりそうになった。

「でも、今まで一度も見かけませんでしたわ」

「まあ……あいつは目立たないからな。それに、なるべくおまえの気を煩わせないようにって言うておいたし」

「はあ。それで、あの？」

「ああ、理由だろ」

シエルファがコクコク頷くと、レインはひよいと肩をすくめた。

「これからラルファスにも説明しなきゃいけないんだ。二度手間になるから、ちょっとだけ待ってくれないか」

「……はい、レインがそう言うのなら」
あつさり首肯した。

とにかく、わたくしのためにそうする必要があったのですね。

シエルファはそう一人決めし、疑う気すら起こさない。例えどのようなことを始めようと、レインが自分に悪しきことをするはずがない。そう信じているのだった。

それに、のんびり考えている場合でもなくなった。

もうすぐ宮殿裏手の入り口というところで、レインがふと立ち止まった。

今度こそしっかり腕を組んでいたので、それについて注意されるのかと思っただけ全然別の理由だった。

「なるほど、怪しい気配ね。ギョントターのヤツ、上手いことを言う」

気配？

シエルファは急いで組んだ腕をほどき、背後を見、それから前方に目を戻す。

誰もいない。

左手に城壁があり、右手には宮殿がある。ただし、宮殿の見える限りの窓にはカーテンがかかっていて、誰かが覗いているわけでもない。もちろん、さっきのように木立の影に人もいない。

しかし、レインが「気配がする」と言うのなら、絶対に誰かがいるに違いない。

自然とレインにもっと寄り添おうとした時、その彼が動いた。

といっても、実際にシエルファが見たのはレインの残像である。

腰を落とし、魔剣を抜いて下から上に振り上げる。そこだっ、という声に合わせるように、ブレた黒影が遅れて本人と重なる。相変わらず人間離れた反応速度だった。シエルファが瞬きした時には、レインはもう攻撃動作を終えていた。

振り切った魔剣の軌跡が、くつきりと青い半円を残す。

ガカッ

そんな破壊音がした。

遙か上方の城壁の一部が破壊され、破片を散らして弾けた。頑丈な石造りなのに、傾国の剣の「見えない斬撃」には耐えられなかったらしい。

落ちてきた破片を避けるため、レインはシエルファを軽々と抱き上げ、さつとその場から退避した。突然の攻撃に驚くよりも抱いてもらったことが嬉しくて、シエルファは小さく歓声を上げた。随分と呑気だと自分でも思うが、レインと一緒にいると深い安心感があり、なにも気にならなくなってしまうのだ。

「ちっ。手応えはあったが……」

ドカドカと小道に破片が落ちてくるのを見上げ、レインは舌打ちする。

「コソコソ逃げるのだけは達者だな。俺の足なら今からでも追いつけるけど」
自分の腕に抱いたシエルファに目をやり、

「——そうもいかんよなあ。おまえをほっとくのはまずいだろうし」
わたくしならここで待っていますよ。

シエルファがそう言おうと思った矢先に、ビィイー、とけたたましい笛の音が響いた。付近の壁塔^{へきとう}で見張りについていた兵士が、異常に気付いたのだ。

「お、さすがにラルファスの配下は真面目^{まじめ}だな。コトが起きてからの立ち上がりが、早いこと早いこと」

眩^{くら}き、シエルファを抱いたままいきなり走り出すレイン。

目指すは前方の入り口である。

「あの、残っていて見張りの方に説明しなくていいのですか」

「いいさ。へたに説明なんかしたら時間食うし、城壁が壊れたのを俺のせいにされたらたまらん」

俺のせいもなにも、誰がどう見ても今のはレインのせいだと思われるが、もちろんシエルファは咎^{とが}めたりしない。そうですね、と素直に頷^{うなず}く。

それよりも彼女にとつての不満は、「せつかく抱いてもらったのに、宮殿に入ったら降ろされてしましますわ……」という一点に尽きるのだった。

ラルファス・ジュリアード・サンクワール

レインの名前を知らない者がこのサンクワールにいたとしても、ラルファスの名を知らない者はまずいない。

なにしろ家柄がとびきりいい。

サンクワールの歴史はおよそ千数百年の長きに渡るのだが、その建国の祖である五人の内の一人が（ちなみに、五人とも人間ではないという噂がある）彼の直接の先祖なのだ。

ちなみに、この建国の五人がサンクワール貴族の発祥^{はつしょう}であり、直系の子孫は特に貴族達の尊敬を集めている。

当然ラルファスも、待遇的には準王族であり、傭兵^{ようへい}上がりで爵位^{しやくい}も持たないレインとは、宮廷での扱いが全然違う。

仮に、なにかの事情で王の直系が途絶えた時には、ラルファスが王位を継ぐことさえ有り得る。

さらに、この国で貴族といえば「威張り散らすだけの役立たず」だと民衆の間では散々な不評だが、彼だけは例外である。圧倒的な民衆の支持を受けている。身内である貴族を特別視しないし、本人の性格もいいからだ。

部下の信頼も厚い。先の戦いで、早々と瓦解^{がかい}した他の上將軍^{じょうしやうぐん}の部隊に比べ、ラルファスの指揮す

る部隊が最後の最後まで崩れなかったのは、彼がそれだけ部下に慕_{した}われていた証_{あかし}だと言える。

で、その比類なき重要人物であるところのラルファスは、レイン達がノックもせず部屋に入ると、席を立て驚いたように王女を見た。

ちように配下の騎士と話していたところのようで、彼に向かって指示を出す。

「あとで私も行く。とにかく警備を強化するように。それから、城門を閉じて今しばらく誰も出してはいけない」

はっ、と敬礼してから、その騎士はレイン達に一礼して急ぎ足で部屋を出て行った。

部下が扉を閉めると、ラルファスは政務を執_とっていた机を離れ、王女の眼前で恭_{うやうや}しく膝を折った。

「おはようございます、王女様。わざわざご足労いただき、恐縮です」

「おう。まあ気にするな、ついでだしな。でも、もうそろそろ昼飯時だぞ」

「おまえに挨拶_{あいさつ}したんじゃない」

ラルファスは苦笑して立ち上がった。いつもながら輝くばかりの美貌_{びぼう}だが、表情に少々疲れが見える。

「それより、今報告があつたんだが……何者かが、城壁を一部破壊したらしい。なんのためにそんな真似をしたのかは知らないが」

「なんと、そんな破壊工作が！」

とレインは目を見開き、

「悪辣_{あくらつ}なヤツもいるもんだ。そうか、城壁を……。許せんなあ。全く油断ならん世の中だ」

腕を組み、痛ましそうに首を振る。その生真面目_{きまじめ}な表情がおもしろくて、シエルファは思わず口元に手をやってしまった。否応なく、くすくす笑いが漏れる。

これがまずかつたらしい。

ラルファスはいぶかしそうにシエルファを見、壁にかけられた平凡な静物画をやけに熱心に眺めるレインを見た。すぐに結論が出た。

「……おまえが犯人だったのか」

「おおっ」

ちよつとのけぞるレイン。

「なんでいきなりそうなるっ」

「ご、ごめんなさい、レイン」

シエルファが反射的に謝_{まじやう}ってしまい、計らずも駄目押しをした。

「……やっぱりおまえじゃないか。レイン、まさか王女様を喜ばせるためにわざと破壊して見せた、などと言わないだろうな」

「おまえ、俺のことをなんだと——」

レインは絶句し、

「いくら俺でもそんな理由で城壁をぶっ壊したりするか！ 例のアレだよ、本格的に現れたんだ」
「なにっ。姿を見たのか？」

「いや。黒い影だけだ。手応えはあったが、逃げられた」

「それは——」

言いかけたラルファスはなにかに気付いたように顔をしかめ、軽く咳払いした。

「……その話は、後ほど聞こう」

「今でいいじゃないか。そのために俺を捜していたんだろう」

レインは、許しも得ずに勝手に部屋隅のソファに体を投げ出し（すぐにシエルファが隣に座った）、ちらつとシエルファを見てから言った。

「本人に何も言わないのはどうかと思うぞ。おまえの気持ちもわかるが、はつきりと知らせるべきじゃないか？ 判断するのは、主君の役目だしな」

「しかし——」

また何か言いかけたものの軽く息を吐き、ラルファスは自らもレインの向かいに腰を下ろした。

「そうかもしれない。それに、私も今朝方ギュンターから教えられた所だしな。詳しい話をぜひ聞きたいものだ」

「……なんのお話でしょう？」

シエルファはレインの顔を見上げた。

なにかこわい話なのだろうか。

白い小さな手がレインの腕に伸びかけ、寸前で思い止まる。ここにはラルファスもいるのだった。不安顔のシエルファに、レインが実に気安く言った。

「つまり、あなたは暗殺者に狙われているんですよ、姫様」

息を呑み、シエルファはまじまじとレインを見返した。言葉の内容をちゃんと理解するまでにかなりかかった。

先ほどのレインの行動といい、これまでの会話といい、事実は明らかなのだが、シエルファには「まさか」という思いがあったのだ。

だって——

「……わたくしなど狙ってなんになるのでしょうか」

むしろ、驚きを籠めて尋ね返す。

無論、コトの重要性は認識しているのだが、命を狙われるほど自分が重要人物だとは、とても思えないのである。何しろ、今までが今までである。

臣下二人は互いに顔を見合わせ、まずラルファスが口火を切った。

「王女様……ご心中はお察ししますが、御身のお立場はご自身がお考えになるより遙かに重いのです。狙う不埒者がいても不思議ではありません」

なんとか言葉を選ぼうと腐心するラルファスを横目に、レインがざっくらばんにぶちまけた。

「ていうか、敵の主君を倒すのは相手を自滅させるのもってこいの手段なんですよ、簡単に言えば。特に、この国は現時点、姫様以外に後継者がいないですしね」

「おい、レイン！」

「わかってる。キツい言い方なのは承知の上だ。しかし、事実^{じじつ}は事実だしな」
だが——とレインの声が不吉に低くなる。

「気に入らん、実に気に入らん……この俺がいる限り、そんなふざけた真似は絶対にさせん」
そのセリフには誤解しようもない殺気が籠^{かこ}もっていた。戦場とは無縁に育ったシエルファでさえ、はつきりと感じ取れたほどである。

部屋がしんと静まりかえる。

もつとも、シエルファが黙っていたのはラルファスとは理由が違い、主に感激していたためだったが。



濃厚な殺気を振り払うように座り直し、ラルファスがやっと問う。

「それで、相手は掴^{つか}めているのか」

「いや。まだギンターもそこまで掴^{つか}んでないんだ。ただ、暗殺ギルドの内偵者から『王女暗殺』

の話を聞いたただけでな。……依頼があつたのは間違いないらしいが、そいつも依頼人までは知らないらしい」

「やはり、相手はザーマインだろうか」

「……可能性としては一番大きいだろうがなあ。こればかりは捕まえてみないとなんとも言えない」

「そうか……そうだな」

ラルファスは思い悩んだ表情で頷^{うなず}き、肝心^{かんじん}なことを尋ねた。

「で、どうする」

「どうするって？」

「王女様の身辺警護だ、もちろん。今まで通りというわけにはいかないだろう」

「うーん、ギンターにも言い含めてあるし、大丈夫だとは思うが。しかし今日みたいなことがあると、念を入れた方がいいかもしれん」

そこでレインは、何かを期待するように自分を見つめるシエルファに気付き、ポリポリと指で頬^ほをかいた。

「まあ、当分は俺がついてることにしよう」

勢いに押されて宣言してしまう。

「心配いらないですよ。俺さえそばにいれば、例えばドラゴンの群れが一挙に押し寄せてきても楽勝

つてもんです」

言い切って胸を反らす。

ちなみに、今のセリフに根拠は全然ない。

だが、これが効いた。

何が嬉しいのか、顔一杯に笑顔を弾けさせる。先程まで表情に残っていた憂^{うれ}いは、綺麗さっぱり払^{はら}拭^しされていた。

両手を胸にあて、何度も頷^{うなづ}く。

「はい、信じています。とても安堵^{あんど}しました」

なぜかラルファスまでもが便乗^{びんじよう}した。

「おまえがついているのなら、心配はあるまい。胸のつかえがとれた気分だ」

「……いや、少しは心配しろよ、こら」

レインの心中は多少複雑だった。

そんなに簡単にホラを信じてどうする!?

「私は城門に行く。命令を出したままだしな」

話はこれで終わり、とばかりにラルファスは立ち上がった。

「もしかするとそのくせ者を捕まえられるかもしれない……望み薄だろうが」

「そらそうだ。向こうは暗殺のプロだからな。失敗した後の逃げ足は速いさ」

「だが、調べないわけにもいくまい。とにかく、戴冠^{たいかんしき}式^{しき}までには事実関係を明らかにしたいものだ。今は大事な時だからな」

壁際の長剣を取るラルファスを、レインはじいっと眺めた。

「なあ。おまえ、なんか疲れてないか。ちよつと精彩^{せいさい}を欠いているというか……。ちゃんと飯食って寝てるか、おい?」

「食べる方^{かた}はともかく、寝る方は少し足りないだろうな。だが、まだまだ大丈夫だ。政務に支障が出るほどではないさ」

さわやかに笑うラルファスだが、なんとなく無理しているようである。

ザーマインとの戦いで、サンクワールは多くの人材を失った。そのほとんどは戦死したのではなく、戦^{いくさ}が始まる前に国を捨てて逃げ出したのである。あろうことか、その中には要職にある丞相^{じようしやう}のような人物もいたのだ。彼は戦いが済んでからノコノコ戻ってきたが、ラルファスは王女に進言して断固とした措置^{そち}を取り、その丞相^{じようしやう}を解任した。他にもそんな例は多い。

それは、国内を清浄化するためには避けられない措置^{そち}だったとはいえ、皮肉なことにそのせいでラルファスの仕事が増えたのもまた事実なのだ。

「いや、政務に支障^{しざう}って、そもそもおまえは騎士だろう。いざという時に戦えないほど疲れているようでは困るぞ、おい。俺なんかおまえ、そんないざという時のために、昨晚はたっぷり十時間は寝てるぞ」

「……それは少し寝過ぎだと思うがな」

ラルファスはまた苦笑した。別に腹を立てたわけではなく、ただあきれたようだ。

「とにかく。今晩は早めに寝ろ。あまり悩むな。はげるぞ」

いらん説教をしつつ、レインも席を立つ。

さりげなくドアを指す素振りを見せ——いきなり途中で斬りかかった。

☆——☆——☆

流れるような動きで、振り向きざま抜剣して身体を捻る。一連の動作には切れ目がなく、まさに風のような素早さだった。

同時に、ラルファスもさつと腰に手を伸ばす。

すぐそばで見ているシエルファが、何が起こったのかすぐに理解できずに目を丸くしている。魔剣と魔剣が激しく激突し、室内に盛大に火花が散った。

バチバチバチッ

青き閃光を真紅の輝きが受け止める。刀身にチャージされた純粋な魔力同士が反発を起こし、や

かましいスパーク音を立てた。

「くっ」

かろうじて斬撃を受け止めたラルファスは、ぐいぐい押してくる馬鹿力に歯を食いしばった。レインの攻撃を受け止めるのは初めての経験だったが……なんというスピードとパワーだ！

「やるな」

鏢迫り合いを演じる魔剣の向こうで、レインがにと笑う。こちらが渾身の力で押しているのに、向こうはほとんど力を入れていないように見える。

「さすがに、さっきぶち倒した筋肉馬鹿とは比べ物にならない反応だ——しかしっ」

叱声と同時に、レインの膝が凄まじい速さで持ち上がり、ラルファスの鳩尾を襲う。

飛び退るようにして避けたが、レインはほぼ同時に間合いを詰め、今度は横殴りの斬撃が唸りを上げて迫る。

膝蹴りは単なるフェイントだったらしい。騎士の作法とは明らかに異なる、実践のみで鍛えられたレインの戦法に、ラルファスは戦慄を禁じ得なかった。この男は、五体全てが凶器に成り得るらしい。

「——むっ！」

下からすくい上げるように真紅の魔剣を振り上げ、なんとか斬撃を弾く。と、相手の魔剣は光の尾を引いて軌跡が変わり、肩口を狙う袈裟斬りに、あるいは流星のような

突きに変化した。黒衣を纏った長身が軽々と部屋を舞い、斬撃が雨霞と降り注ぐ。

早々と壁際に避難した王女が小さな拳を口元に当てていたが、そちらに気を遣う余裕などない。レインの魔剣は、あたかもこちらの一手先を読むがごとく、常に攻撃の先手を取っている。あらゆる方向から襲い来る光の斬撃に、ラルファスは翻弄されつつある。

今のところなんとかか受けているが、完全な守勢に回ってしまったことを認める他はない。

レインの動きが速すぎ、反撃に転じる余裕がないのだ。目で追うというより、気配を追ってラルファスは戦っていた。

そして、その事実が彼の闘気に火をつけた。控えめな性格とはいえ、ラルファスにも幾多の戦場をくぐった騎士としての誇りがある。一方的な守勢に回っている自分に、かっと心が激した。レインに腹を立てたのではない。自分の不甲斐なさを恥じたのだ。

「はああああっ！」

レインの剣を弾いた直後の、有るか無きかの微かな隙に、ラルファスは思い切って乗じた。

紅き魔剣の切っ先を、渾身の力で突き出す。

——いけない！

即座に後悔した。相手を忘れ、ここがどこかも忘れ、本気で戦っていたのだ。真紅の輝きが黒いシャツのど真ん中に吸い込まれていく。もちろん、致命傷だ。

だが――

それはラルファスの錯覚にすぎなかった。捉えたかと思えた長身は陽炎のようにゆらぎ、連続で生じた残像が、一斉に真横へ流れる。

一瞬で、やや右手に現れたレインの「実体」へと重なった。

魔剣が貫いたのは、彼が避けた後に生じた影に過ぎなかったのだ。

「やつぱり、いつものおまえじゃないぞ。反応が鈍くなっている」

いつの間にか、あつけらかんとした顔でレインは自分の魔剣を取っていた。

そしてラルファスの手元を見て、一つ頷く。

「とはいえ、ジャステイスの扱いにはもう慣れたようだな」

「お陰様でな……」

それだけ言うのがやつとだった。ほんの十数秒の攻防に過ぎなかったが、呼吸がちりぢりに乱れてしまった。レインの意図には勘付いていたものの、疲れることおびたしい。

それでもラルファスは律儀に、もう何度も口にしたセリフを繰り返そうとした。魔剣の事が話題に上ると、言わずにおれないのだった。

「時に、くどいようだが本当にこの魔剣を譲り受けていいのか。これは、元々おまえの戦利品だろうに」

いま散々振り回していた、真紅のオーラが刀身にのたうつ魔剣は、ザーマインのレイグル王がレインとの一騎打ちの時に手にしていた物だ。

ところが苦闘の末レイグルは逃走し、魔剣ジャスティスだけが後に残されたのである。だから当然、魔剣の所有権はレインにあるはずだ。少なくともラルファスはそう思う。

「いや、それはおまえが持ってた方がいい」
これまたいつもの返事。

「よりにもよって、『正義』なんて銘を持つ剣は、俺には似合わないしなあ。俺は正義の味方とは対極にある男だし」

「しかし——」

「いいって！ もらったけもらったけ。どうせ俺が持っても速攻で売り飛ばすだけだ」

……確かに彼ならそうするかもしれない。レインらしい言いように、心配顔だった王女がやっと笑顔を見せた。

レインも控えめに微笑み返したものの、ラルファスに向き直った時は、すっかり真面目な顔つきになっていた。この男なりに、心配してくれているらしい。

「とにかくだ、無理でもなんでも少し休んだ方がいい。おまえのトコには、ナイゼルみたいに文官能力有りそうなヤツもいっぱいいるだろ？ そいつらに任せろよ」

「忠告通りにした方がよさそうだな。……それにしても」

軽く深呼吸などして、ラルファスは呼吸を整える。

「今で余計に疲れた気がするぞ……。もったも、決して悪い気分ではないが。どうだ、後でもう

一手」

「いや、きつぱりと断る」

実に嫌そうに顔をしかめるレイン。

「そういう疲れることは遠慮しとく。今のが最初で最後だな」

「少しも疲れているようには見えないが……残念だ。毎日でも練習に付き合ってもらいたいんだが」

ラルファスは心からそう呟いた。

本気で要請されたらかなわないとも思ったのか、レインは王女と一緒にさっさと部屋を出てしまふ。

仕方なくラルファスも続く。どのみち、今は城門に行かねばならない。

「それにしても、初めて剣を合わせたが恐るべきスピードだな。技も大したものだが……スピードの方は、ドラゴンから受け継いだのか？」

廊下を一緒に歩きつつ、なんとなくしに訊いてみる。

大陸最強の種族たるドラゴンを一对一で倒すことに成功した者は、そのドラゴンが持つ『力』を手に入れることが出来る……誰が広めたものか、昔からそんな伝説がある。それは、一種の呪いなのだそうだが、いずれにせよ、そんな「ドラゴンスレイヤー」なる者が実在した試しはない。

例えそんな「巨大な特典」が本当にあったとしても、ドラゴンとはそれほど簡単に殺せる生き物

ではないのだ。屈強の戦士が大勢いても不可能に近いのに、一人でとなるともう夢物語にも等しいだろう。故に、伝説はあくまでも伝説にすぎない。

ドラゴンスレイヤーとは、吟遊詩人の詠む詩のみに登場する英雄なのだ。——と、ラルファスを初め、ほとんどの人々は思っていた。

ところが最近、ひょんなことでレインがそのドラゴンスレイヤーだったと判明したのである。

もう二十五歳のクセに随分と若々しい外見だと思っていたが、ちゃんと理由があったわけだ。ドラゴンの不死性を受け継いだなら、老化と無縁なのも当然だろう。

ともあれ、不死の力を手に入れているくらいだから、瞬発力というかスピードもドラゴンスレイヤーの恩恵かと思っただけである。

が、レインは大いに気を悪くしたように言った。

「馬鹿いえ。そんな美味い話があるわけないだろ。ドラゴンから受け継いだのは不死性と筋力と魔力と特殊能力くらいのもんだ」

……十分すぎるほどたくさんあるように思える。

そもそも、筋力アップは瞬発力の向上にも役立つと思うのだが、などと指摘すると、説明してくれた。

「……まあ、ある程度までは役に立つな、確かに。しかし、人間の生活で龍並の筋力はいえって邪魔なんだ。だから、自分であえて封印している。必要な時には馬鹿力も出せるけど、まずそんな必

要ないね」

「では、スピードの方は日頃の努力のたまものか。……そうだろうな、スピードを身につけるには地道な訓練が一番だろう」

「おい、勝手に決めつけるなよ。この俺が『地道な訓練』なんてもんをハアハアやってると思うのか、おまえ。強い上にスピードがあるのはだな——」

と、ここで胸を反らす。

「俺が天才だからだ！」

全然理由になっていない。

おそくただのポーズだろう。努力もせず、才能だけで強くなれるはずがないのだ。

現に、王女が「うふっ」と声に出し、口元に手をやっていた。なにか秘密を知っているような素振りである。ラルファスはその辺の事情を察し、深く納得した。

「なるほど……では、そういうことにおこう」

「……俺のセリフより、姫様の仕草で判断するっていうのはどういうつもりだ、おい」

レインは著しく不機嫌になった。

「あ……ごめんなさい、レイン」

「いえ。姫様を責めちゃいけませんよ。ただこう、なんか納得いかないというか——」
ブツブツ文句を言うレインに、ラルファスは笑って、

「私はおまえの天才性を疑ったことはないさ。不平を言うことはなからう。ただ、素養だけでは越えられない壁があるのも確かだと思うぞ」

「俺に限ってはいいね」

レインの力説を軽く聞き流し、ラルファスは階下へ降りる踊り場で立ち止まった。

「わかったわかった。……とにかく、私は城門へ行くが、王女様のことは頼んだぞ。戴冠式前には外にも出ていただかなくてはならないしな」

「ああ、お披露目だな」

「えっ……どういうことでしょうか」

シエルファがレインの服の袖を掴もうと手を伸ばし、途中でさつと下に降ろす。ラルファスには微笑ましい光景だった。

王女様はこれで、ご自分の想いを隠しているおつもりなのだ。ここは気を利かせて、邪魔者は早く消えるべきだろう。

「それでは私はこれで……。王女様、あとの説明はレインからお聞きください。では」

飯と一緒にどうだ、というレインの申し出を手を振って辞し、ラルファスは微笑みつつ階段を下りていった。



いつまで待っても、誰も来ないですう。

セルフィーはやっと探し当てたレインの自室の前で、ぽつんと立っていた。

『あとで俺の部屋へ来い』

指示を受けてからあちこちで人に訊きまくり、ようやく問題の部屋を探し当てた方がいいが、待てど暮らせどレインはやってこない。

一体、なんの用事なのでしょう……まさか、まさか——などと気を揉んでいたのは昼過ぎまでである。お腹は空しくし、足は痛くなるし、もう「どんな用事でもいいです、はい……」というやつばちな気分相成った。

だいたい、なぜか頻繁に通るかかると衛兵に「ここは何をしている？」と誰何されるのである。その度に「説明したりして、いい加減へとへとだった。もう夕ご飯の時間さえとうに過ぎ、窓の外は真っ暗である。」

ポケットに残った小銭でパンの切れ端を買いに行こうと思っていたのに、こんな時間ではもはやそれも無理。

ハァ。

ため息。そのまま扉にもたれ、ズルズルと石の廊下に座り込みたくなってきた。本気でそうしやうかと思った時、廊下の端を曲がって少女が一人、姿を現した。

肩口で切りそろえたシヨートの黒髪と、活発に動く瞳が印象的である。明るい性格なのは見たただけでわかった。

その彼女はセルフィーを見た瞬間に立ち止まり、不審そうに小首を傾げた。観察している内に表情が険しくなり、ずかずかこちらへ来る。

「ここぞなにしてんのっ」

「え、ええっ」

気圧されたセルフィーが素直に教えてやると、相手の機嫌はすぐに直った。

笑うと険がとれてとても可愛い。

「ああ。そう言えば、テストがあるとかレニ隊長が言ってたっけ。ごめんね、妙に勘ぐって」
なにを勘ぐるのでしょうか？

セルフィーが聞き返すより先に、彼女は自分の小さい胸を指差し、

「あたし、ユーリっていうんだ。騎士見習い。お仲間ってことで、よろしくね！」

「あ、はいっ。よろしくお願いしますっ」

ペコペコ頭を下げる。

こんな年頃の少女の身で、騎士見習いだっただ！自分を棚に上げてセルフィーは感心した。
「そんなに頭下げたりしなくてもいいってば！あたし、十六だよ？同じくらいの歳でしょ？」

「ええ、まあ。わたしは十七です」

「そうなんだ。ちょうど、ここって同じ年頃の女の子が少ないなあと思ってたトコなのよねえ。あなたみたいな人が来てくれて嬉しいわ、うんっ」

にぱっと笑う。

微笑み返さずにいられなくなる笑顔だった。

しゃべり方もハキハキしているし、本当に人なつっこい。今までの心細さが消えて、セルフィーまで気分が浮上してきた。

「ところで、その用事ってさあ」

すっかり「友達モード」になり、ユーリは人の気配もないのに声を潜めた。

「なんか怪しくないかなあ。なんでいきなり『俺の部屋へ来い』なんて言うわけ、あいつ——じゃなくてっ、將軍」

「やっぱり、そう思います？」

なんとなく、セルフィーまで声を低めた。

ユーリは村の井戸端で世間話をする主婦のごとく、「そりゃ思うわよ！怪しい、絶対怪しいわ」と断言した。

——乙女の貞操の危機！

あえて口に出さなかったが、二人の脳裏に浮かんだ語句はまさにソレである。ユーリの言い方にはなんだか説得力があり、あまり真剣に心配していなかったセルフィーまで「これは危ないので

は」と思えてきてしまった。

なんとなく自分の胸をかき抱いたところへ、またまた足音。

見れば、話題沸騰中のレインが、王女と談笑しながらやってくる所だった。

ええっ、今更——

もう逃げようと思っていた所なのに。

セルフィーは戦慄した。

任せてっ！ という顔つきで、ユーリが盾のように立ちはだかってくれた。

「で、俺がガキの頃には、この『騎士とお姫様』てな遊びがえらくはやっていて、暇さえあれば——」

身振り手振りで、なにやら子供の遊びについて熱く語っているレイン。王女はその内容を一語たりとも聞き逃さずまいという表情で、コクコク頷いている。青い瞳が興奮でキラキラ輝いていた。二人とも、こちらなど見ていない。

「だから、俺はお姫様抱っこについていちゃ、子供の頃からエキスパートだった——て、なんだ？」

やっとレインがセルフィー達に目を向けてくれた。

「二人揃ってどうした？　なんか用事か」

——はああ？

セルフィーはふらつと足下がよろけた。

わ、忘れてます……思いっきり忘れてます、この人……

目眩がして、視界がぐらぐら揺れた。まあ、それはあまりにも腹ぺこだったせいもあるだろうけれど。

「ちよっと、將軍！」

言葉もないセルフィーに代わり、ユーリが文句をつけた。王女にはちよっと頭を下げたが、レインには挨拶すらしなかった。気安い仲なのか、あるいは彼女が恐れ知らずなのかどちらだろう。

「女の子を呼びつけただけでも褒められたことじゃないのに、呼んだのを忘れるってどういうことですか。こんな冷えた廊下に立たせとくなんて、最低です、最低っ」

ポンポン捲し立てるユーリに、王女が驚き顔になっていた。

それはそうだろう。いくら平民だろうと上將軍は上將軍。ペーペーの騎士見習いと武官の最高位である上將軍の間には、天地にも等しい身分の差がある。こんな口の利き方はまず出来ないし、そもそもしてはいけないのである。

レインがちよっと眉をひそめた。

さすがに腹を立てたのだろうかと心配したセルフィーだが、幸い違った。

「俺が呼んだ……？　ああ、そうか！　うん、呼んだ呼んだ」

簡単に理解を示し、セルフィーを手招きした。

「ここじゃなんだから、部屋へ入ってくれ」

「ええっ」

声を上げたのはユーリである。

「なんでですかあ。ここで言えはいじゃないですかっ」

まるで喧嘩^{けんか}をふっかけるような言い方だった。

「やかましいな。下っ端^{したは}の使い走りは黙^もってるろっ。俺^おの深謀遠慮^{しんぼうえんりょ}をおまえごときが推^おし量^{はか}れるかっ」

呼び出しを忘れておいて深謀遠慮^{しんぼうえんりょ}もないものだが、レインはそう言うと言引にセルフイーを部屋へ押し込めた。ユーリはおろか、王女にまで「しばしお待ちを」と言い残し、後ろ手にボタンとドアを閉める。

王女様をお待たせしていいのでしょうか、とセルフイーは他人ごとながら気になった。

「待たせて悪かったな」

「あ、いえ……」

「大した用事じゃない、そう固くなるな。なにも『服を脱げ』とは言わん」

「そ、そうですかっ」

レインはポケットから皮の小袋を取り出すと、そこから銀貨をざらざらと掌^{てのひら}にあけた。そのままセルフイーに突き出す。

「ほら」

「えっ」

「前借りさせてやる。苦しいんだろ、今」

「え、ええっ!？」

意表をつかれまくり、セルフイーは思わず大声を上げてしまった。まさか……そんな理由だとは。

「そこまで驚くことはなからう」

レインはそう言うのと、固まっているセルフイーの手を無理矢理引つ張り、銀貨を握らせた。とても固い掌^{てのひら}だが……温かかった。

「でも……こんなことしていただくわけには」

「馬鹿。なにもやるっていうんじゃない。次の俸給^{ほうきゅう}の時^{とき}にばっちり引いとく」

「だけど——」

「あいな」

レインは太股で歩き、部屋の隅に転がる大きめの革袋を肩に担^{かた}ぐ。

セルフイーもやっと周囲を見る余裕が出来たが、ここは随分とがらんとした部屋だった。

最低限の家具しか置いてない。

目立つ物といえば、ベッドと机くらいである。

この人は派手好きに違いなと思っていたのに、とんだ勘違いのようだ。

さらに脳内評価を上げたセルフイーに、当のレインがぶっきらぼうに言う。

「おまえは俺の部下だろう。なら、黙って俺の言う通りにしてたらいいんだ。俺が白いといえば、黒い物でも白くなるんだ！　そこん所を理解しろ」

内容は荒つぽいが、声は穏やかだった。

「わかり……ました」

頷くしかなかった。急に自分が恥ずかしくなった。とんだ誤解をしていたものだ。わざわざ部屋へ呼びつけたのは、皆の前で恥をかかすまいという配慮だったのだろう。そうとしか思えない。

本当は優しい人なんだ……言葉遣いとかはこわいけど、でも優しい……。なんか、かつこいいかも。セルフィーのレインへの評価というか好感度が、急角度でぐぐっと上昇した瞬間である。

「あの、ありがとうございます」

「おう。その金で服もいいの買えよ。やっぱ、女が貧乏臭い恰好してるのはアレだからな。あ、それとスカート買うなら、必ず短めの丈を選ぶようにな。俺が思うに、股下七センチくらいのヤツが丁度いいと思うぞ」

「……はい」

感激のあまり、ロクに内容も聞かずに首肯する。優しくしてもらえた嬉しさと、飢えなくて済んだ安堵感に、セルフィーはじゅんとなっていた。なにげに、飢える心配が消えたのは大きい。

「――そうだ」

ドアのノブに手をかけたまま、ふとレインが言った。

「おまえ、最初に姫様を見た時、なにか感じなかったか」

「えっ。王女様ですか」

セルフィーは瞬きし、

「とてもとても綺麗な人だと思います。将来はもの凄い美人におなりでしょうね」

「……それだけか。なにも感じないのか、本当に？」

やけにしつこく訊く。しかし特に心当たりもないので、黙ったまま頷いた。

レインは、喉に魚の骨でも引っかかったような複雑な表情をしていたが、結局肩をすくめドアを開けた。

廊下に出る際に小さい声でセルフィーは、

「神様……感謝します」

と祈りを捧げた。結構、信心深い性格なのである。サンクワールは多神教であり、セルフィーは主に戦を司る神として知られる、ミゼル神の信者だった。

恥ずかしいから神とは別に、レインへのさらなる感謝は心の中で捧げたのだが――

「おいこら」

コッソンと頭を殴られた。

「神なんかより俺に感謝しろ、俺につ。これからは毎晩、誠心誠意体力の続く限り夜伽のお相手を務めます……それくらいのことを言ってみろ、えっ」

むちゃくちゃを言う。セルフイーよりも、気まずそうに廊下で待っていたユーリの方が憤慨していた。

「なんの話ですか。部屋で何してたんです、怪しいなあ」

「秘密だ」

「……じゃあ、そのでっかい袋は？」

「ああ、これは着替えさ。今日から部屋を移動するんだ。ちょっと姫様の警護に当たる必要があったな」

その返事で、ユーリは益々怪しむ顔になる。

そこで王女が、無邪気な声音でいきなり訊いた。

「レイン、夜伽ってなんですか」

「え、ああ……そうですね」

レインはもう歩き出し、

「男女が親睦を深めて、より仲良くなることを夜伽って言ってますよ」

——物は言いようである。

「知りませんでした！」

とても残念そうな声。

やや焦ったようにレインの服の袖を引く。

「それでは、ぜひわたくしとも夜伽してください！」

レインがなんと答えたかはセルフイーには聞こえなかった。もう廊下を曲がってしまったからだ。隣でユーリが「なに、あの態度っ」と肩を怒らせている。

しかしセルフイーは頬を染めたまま、レインが去った方向をいつまでも眺めていた。



シエルファが「そろそろ入浴の時間なんです」と言うので、レインは付き添って王宮深奥部の王族専用風呂（勝手に命名）の前まで来ていた。

この辺りまで来るとさすがにチェックが厳しく、王族か、せめてレインのような上將軍くらいの身分がないと、途中で必ず足止めを食う。立ち番の兵士に誰何され、「出直して来い」と言われるのがオチである。

というか、レインも最近まで「失礼ですが、レイン將軍は通すなと言われております」などと殷勤に追い返されていたクチなのである。

しかし、今や状況は一変した。

シエルファの御代間近になり、レインの待遇は飛躍的に上昇していた。なにしろシエルファ自身から、圧倒的というのも馬鹿馬鹿しいほどの全面的な信頼を受けている。顔を見る度にイヤミを言われていた、前王の頃とは比べようもない。

したがって、これまで入ったことのない深部まで、顔パスでズカズカやって来られたわけである。「普通、姫君の入浴とかは、侍女の二三人も付いて来るはずじゃないか？」

どんな巨人が入るんだここからっ、と言いたくなる、どでかいアーチ形の入り口を前に、レインは興味本位で訊いてみた。

「ごく最近までそうでした。でも、わたくしは一人の方が落ち着きますし……それに」

「それに？」

「相手が例え女の人でも、裸身を見られるのがなんだか恥ずかしくて……だから、遠慮してもらっています。前はいくらお願いしても駄目だったけれど、このところ、皆さんわたくしのお願いを素直にきいてくださるんです」

着替えを胸に抱いたまま俯き、なかなか可愛らしいことを言うシエルファ。

レインは口元に皮肉な笑みを刻んだ。

「そりや次期王ともなると、言葉に重みが増すからな。これからはおまえの天下だぞ、チビ。思いつきりわがまま言っちゃれ」

無責任にけしかける。

この子はこれまで散々不愉快な目に遭っているのだから、多少のわがままは許されるとレインは思っているのだ。

「わたくしは別に。今のままで十分幸せです。——レインがそばにいますから」

真珠のような白い歯を覗かせ、本当に幸せそうに微笑む。内に籠もる感情というか愛情というか、とにかくそういうのがモロに吐露された笑顔で、さしものレインもとつさに軽口が出なかった。

照れ隠し代わりに、片手を振る。

「わかったからほら、行って来いよ。ここで待つてから」

たおやかな背中を軽く押してやると、シエルファはあどけない顔でレインを見上げた。

「いえ、ちょうど良い機会ですし、済ませておきたいことがあるんです。レインも一緒に入ってくださいと嬉しいですわ」

「……は？」

なにが良い機会なのだろうか。

「だけどおまえ、さっき裸身を見られるのは嫌だと言ったろ」

「もちろん、レインは例外ですよ」

気負った様子もなく、シエルファはさらりと述べる。

「いや、いくらなんでもそれはまずいだらう。俺はここで大人しく待っているさ」

——などと答えるレインではない。

あ、そうか。おまえが気にしないなら俺も全く気にしない、ということ、これまたあっさりと一緒に入浴することを承知した。

中に入ると、木製の大きなドアがあり、そこから先にさらに進んだ。もちろん、シェルフアがしっかりとドアの鍵を開めた。

そのドアの奥は、白い大理石のタイルを床一面に張った広々とした空間で、一瞬ここが風呂かとレインは思ったが、なんと単なる脱衣所だった。壁際に燭台^{しよくたい}を大きくしたような銀の台座が数個ならんでおり、その上に藤を編んだ籠^{かご}が載っている。ここに服を入れろ、ということらしい。

しかも。

対面の壁に、直径数メートルもある鏡がでんと嵌め込^はんである。そして赤い布張りのゴージャスな椅子が数個。シェルフアにはまだ必要なさそうだが、本来はここで化粧などするわけだろう。その証拠に重厚なワードローブも隅にそびえ立っている。

何気なく開けると、煌^{きら}びやかなドレスの山だった。平民の視点から総合的に見て、非常に腹の立つ場所である。

「むう……。あのダグラス王は、こんなトコでのんびりと風呂につかっていたのか……。なんかむかつくな、おい」

「いえ。お父様には男性専用の浴場があつて、そちらです。ここは女性用なんです」

「王族なんて数は知れてるのに、ますますむかつく……。庶民の暮らしをなめているな。上將軍^{じようしようぐん}の俺^{おれ}だって、こんな広い風呂は城に（レインの持ち城、コートクレアス城のこと）しつらえてないのに」

「あ……ごめんなさい」

別に責任もないだろうに、シェルフアは申し訳なさそうに長いまつげを伏せた。レインが相手だと気にならないのか、もうドレスを脱ぎかけていて、純白の下着姿が半ば露わになっていた。まるで物怖^{ものおそ}じしていない。

「いや、なにもおまえのせいじゃないさ」

レインは、剥^むき出しの華奢^{かしゃ}な肩を気安く叩き、自分もさっさと服を脱いでいった。

脱衣所も啞然^{あぜん}とするほど広かったものの、その先にあつた浴場はそれに輪をかけてとんでもない規模だった。奥行きもある上に全体が吹き抜けの空間になっていて、天井まで数階分くらいの高さがあるのだ。

湯船はそれこそ遊泳できるほどの大きさの円形をしており、余裕で数十人くらいは入れそうだった。しかも、悪趣味というかなんとか、湯船の真ん中には壺を肩に乗せた女神像があつて、その壺からジャボジャボお湯が出ていたりする。

貴族趣味の象徴みたいな、あつけにとられるほど贅^{ぜい}を尽くした風呂だった。

「こりやまた豪勢な……」
一渡り眺め、レインは唸り声を上げた。

なにか、維持するだけでも莫大な予算が入りそうな風呂である。

どうやらここは宮殿の奥まった端に当たるらしく、正面に正方形の窓が幾つか並んでいた。ただし、その窓まで数メートルの高さがあるので、覗かれる気遣いはまずない。

「むう、なんか毎日でも来なくなるな」

「レインさえよければ、毎日でも一緒に入りたいですわ」

先に湯に入ったシエルファが、振り返って微笑んだ。

特に見苦しく裸体を隠す様子はない。

ただ、レインを見てほんのりと頬を染め、ちよつと俯いた。

小さい声で言う。

「……わたくしとはずいぶんと違うのですね」

レインはすぐには答えず、とりあえず桶でざぼつと湯を被ってから、ゆつくりと身を沈めた。かなり深い……小柄な者なら本当に泳げるだろう。これだけは手放さなかった魔剣を手の届くところに置き、大理石の湯船にもたれて静かに息を吐く。

「そりゃ、違うだろ。男と女なんだから。ひよつとして、見たのは初めてだったりするのか」

蚊の鳴くような声で、また「はい」という返事。

「ふむ。それを聞くと、なんか得した気分だ。つまり、おまえの裸見た男は俺が最初ってことだろ」

「はい……これからもレインだけです」

こつくりと頷くシエルファ。

まだ立ったままであり、すぐにはレインの側に来ようとはしなかった。

なにか深い決意を秘めた顔で、レインから目を離さずにいる。

「……あの、入る前に言った通り、ちよつと済ませておきたいことがあるんです」

「ほお……風呂場ですか？」

からかうように聞き返してみた。

「……はい。これは、裸身が一番相応しいそうですから」

場内騒然とするようなセリフであり、さしものレインも唸ってしまう。

気の利いた返事を考えている間に、シエルファはしずしずとレインのそばに近づき、正面に両膝をついた。

「すぐに済みますから」

顔が物凄く真剣である。

思わず頷くと、シエルファはそつと右手をレインの胸に当て、語り出す。

「五家の一角にして、サンクワール家の末裔がここに誓う。」

願わくば、我が命は永遠に汝と共に。

我が魂も、永遠に汝と共に！ 時には剣、時には盾となりて、我が身を捧げん。運命の全てが汝に背を向けようとも、我が誓いに偽りなし」

黒瞳を瞬くレインに、輝くような微笑を見せた。

「わたくしの名は、シエルファ・アイラス・サンクワール——我が君よ、どうかこの名を胸にお刻みくださいますよう……あなたに誓いを立てた者の名です」

言葉が途切れ、胸に当てていた手が離される。

後は普通に湯船に浸かり、レインの隣に座った。どうやら終わったらしい。

「いや、『我が君』はおまえだろう。なんか大層なアレだったが、今のはなんだ？」

「気にしないでください。自分への、ちよつとした戒めみたいなものですから……」

なにか肩の力が抜けたように、ふうつと吐息をついている。……途方もなく嫌な予感がするレインである。

その気分を読み取ったのか、シエルファがくすつと笑った。

「別にレインの自由を縛るような誓いではないですよ。わたくしだけです、縛られるのは」

縛られるのか、なんか知らんがコアな趣味だな！ などとボケている場合ではない。それはそれで、非常に気になるのだが。

だがシエルファはそれ以上は説明せず、レインにそつともたれてきた。あまり追及されたくない

のかもしれない。

「まあ、おまえが満足ならいいんだけどな」

金髪に手を置き、軽く揺すってやる。

軽い笑い声を立てるシエルファの顔を間近で眺め、ちよつと感心した。

「それにしても、おまえってほんつとに見栄えがいいな。こんだけ近くから見ても、全然文句のつけようがないものな」

これで、あと五、六年先の姿なら言うことないんだが——というセリフはあえて吞み込む。レインも時には気を遣うのである。

シエルファは小さい声でお礼を述べる。

「ありがとうございます。でも、わたくしにはそうは思えません。……外見は変えられませんか、せめてもつと早く大人になればいいと思います……」

考えすぎかもしれないが、なにか意味深なセリフである。

「おまえ以上の美人つてのは、ちよつと想像出来ないんだが。そもそも、どうして早く大人になりたいんだ」

「もつと綺麗だったら……それに、もつと大人だったら、きつと今よりずつと、レインに構ってもられますから」

「いや、それは違うだろう。それだと俺が、外見重視の軽薄男みたいじゃないか。外側だけ良くて

もしようがないぞ」

レインは思わず苦笑した。

「今のままだつて、俺はおまえになんの不満もないさ」

レインがそう言うと、シエルファは湯船の中で座り直した。

「でも……あの時……」

言いかけたまま口をつぐみ、なだらかな胸元に視線を落とす。

あの時というのが何時を指すのか、訊き返さずともわかってしまった。先の戦いが終わった直後に開かれた舞踏会、そこを抜け出して二人で庭園で話した時、シエルファはレインにいわば「告白」したのだった。もちろん、忘れてなどいない。

あの時のレインは、明確な返事をしなかった。なにも彼女を嫌っているわけでもないし、年齢差がどうのというのでもない。ただ、シエルファの想いに応えられなかったというだけだ。

どう返事しても相手を傷つけてしまうような気がして、

『……悪い。今はまだ、おまえの気持ちに応えてやれないんだ』
などと返すしかなかった。

——あの子を守れもせずに死なせておいて、今更自分だけよろしくやろうっていうのが間違っている。

心の中でもう一人の自分が囁く。

まるでその声なき声を聞いたように、湯気越しにシエルファが手を伸ばしてレインの頬に触れた。

「……どうした？」

「レインは優しすぎるんです……」

と胸をつかれ、レインは黒い瞳を見開いた。偶然だろうが、かつてあの少女も似たようなことを言っただけだ。

『レインは優しすぎるのよ……』

——フィーネ。

声に出して呼びそうになり、ぐっと口を引き結ぶ。敏感にもその動揺を感じたのか、シエルファがレインの頬を撫でた。

「人って何年も経つ内に記憶が薄れて、大事に思っていた人のことだつて少しずつ忘れていきますよね……記憶の底に埋もれて、時々しか思い出さなくなる。悲しいことだけれど、どんなに愛していた人でも、長い……長い時間が経てば、思い出に変わってしまうんだと思います」

でも……と言いかけ、シエルファはレインの胸に身を預ける。

「でも、レインは忘れられないんですね。とてもとても優しいから、誰よりも優しいから、記憶が風化していくことが許せない。いつまでも自分を責め続けて決して許そうとしない……レインはなにも悪くないのに」

見上げた碧眼は、今にも泣き出しそうに潤んでいた。

「痛みを分かち合うことができなくて、残念です……でも、いつかは……」

「おまえは」

出した声がしわがれていて、レインは我ながら舌打ちしたい気分になった。唇を湿らせてから言い直す。

「おまえは詩人だな、チビ。……俺は、そんな上等なヤツじゃないぞ」

シエルファはただ微笑んただけだった。

答える代わりに濡れた両腕をそっとレインの背中に戻してきた。

「いつかわたくしも、レインのような強い人になりたいです。守られるだけではなく、時には支えてあげられるように。わたくしは……レインを愛していますから」

口もきけずにいるレインの耳元で、さらに囁く。

「わたくしはあきらめません。いつまでも待ちます。ずっと、ずっと」

衝動にかられて、レインはシエルファをそっと押しやり、大きな瞳を覗き込んだ。

「……レイン」

掠れた声でシエルファが呼ぶ。頬を赤くして、そのまま瞳を閉じた。

レインは黙ったまま唇を寄せ――

「この匂い――ちっ」

甘ったるい微かな匂いと、それに気配を感じた。

目を開けたシエルファが、魔剣を引き寄せたレインを見てはっとしていた。

「レイン、一体……」

立ち上がるうとして、ふらりとよろめいた。

既に匂いにやられているのだ。

「大したこっちゃない。のんびりと風呂に浸かってろよ、チビ。ただの招かざるお客さんだ」

「え、ええっ」

端正な顔が驚愕に歪む。レインの視線を追って背後の窓を振り返ろうとしたが……もう瞳に霞がかかっていた。またふらっと体が傾いた。

「アシマルっていう青い花卉をした花だ。もっと北の方に生えててな。すりつぶすと匂いがきついんだが、人を眠らせる効果もある」

レインはシエルファを支え、淡々と説明してやった。

「ま、気にするな。おまえが眠っている間に片はついてる。心おきなく寝てるといいさ」

普段ならこれで落ち着くはずなのに、なぜか今日に限って、シエルファの焦りの色が引かなかった。

まだ腕の中でもがこうとしている。

しきりに自分の胸を隠そうとしているのを見て、レインは理由に思い至った。

「……あー、ちゃんと見せないようにするって。入ってきたヤツにはこれっぽっちも見せてやらないから、なにも心配ないぞ」

途端に大人しくなり、シエルファはあっさりと身を預けてきた。やはりそれを気にしていたらしい。ふさがりかけた瞼を無理に開け、弱々しく微笑む。

「気をつけてください……という……言葉は……レインには必要ない……ですね……」

「言うまでもないさ」

ニヤリと笑うレイン。

顔にはいつものふてぶてしい笑みが浮かんでいて、さっきまでのしんみりした表情はどこにも残っていない。

シエルファは安心しきったようにもう一度微笑み、そのままがつくりと首をうなだれた。

「しかし、命の心配より裸を見られる方を心配するかね、普通……まあ、信頼されてる証拠だろうが」

呟くと、横倒しにならないようにシエルファを慎重に湯船にもたれさせ、レインは掌を裸身に向

けた。

と、「ブンッ」という音がして、輝く魔法の障壁がシエルファの全身を覆ってしまう。

これだなにも見えないし、身の安全は確保できたわけである。

「さて」

いきなり立ったりせず、レインはただ魔剣を片手に湯の中でくつろぐ。

軽く目を閉じ、気配を探ってみた。

「ふふん……窓の下に……三、四……七人か。眠り込むのを待って突入してくる気だな。ご苦労さまなことだ」

唇を吊り上げ、ふふんと笑う。

あいにく、いつまで待ったところで眠ったりはしない。今の俺は、人間でありながら魔獣（ドラゴン）の『力』をモノにしている。

そう、魔獣に効かないモノは、レインにだって無効なのである。

というわけで、湯船から立ち上がろうとせず、のんびりと風呂に浸かったままである。向こうから来てくれるというのなら、こっちがあくせく動く道理はない。もちろん、自分が殺られるかもしれないなどとは考慮にすら入れていないレインである。

コソコソするだけが取り柄の暗殺者などに遅れは取らない……そう思っている。

「一人だけ残して、後は全員斬る！」

冷淡に言い捨てて静かに時を待つ。

『レインは優しすぎるのよ……』

遙か昔に言われたセリフがまた蘇ったが、首を振って振り払った。どれほど過去を振り返ろうと、時間は決して元には戻らない。かつて確かにいた優しい少年は、今はもうどこにもいない。もう自分は、後戻り出来ないほど遠くへ来てしまったのだ――

「悪いな、フィーネ。やっぱ俺は変わってしまったらしい……どのみちおまえに顔向け出来ないみたいだ」

レインがため息をついた直後、窓から黒い影が幾つも飛び込んできた。



「それで……一人を残して殺したのか」

「うむ」

悪びれずにレインは頷く。

ラルファスはソファでふんぞり返るレインに、問いかけるような顔を向けた。

「おまえの実力なら、全員を殺さずに捕らえることも出来ただろう」

レインはグラスの酒をぐつと呷ってから、凄惨な笑みを見せる。

「七人がかりで女の子を襲うようなヤツらがどうなろうと、俺の知ったことじゃないね」

「……まあ、その件はいい。もう一つ確認するが、王女様はおまえと入浴中だったわけだな。……つまり、お互いにその……裸身だった？」

「そりやそうだろ。風呂に入るのに服着て入るはずないさ」

「ふむ……そして、妙なまじないを聞かされた」と

ラルファスは自分もグラスにワインを注ぎ、正面に座った。何か奇妙な目でレインを眺める。レインが見返すと、じんわりと微笑んだ。

シエルファとレインが仲良くしているからといって、嫉妬するような男ではない。だからこそ、レインもあっさりと打ち明けたわけだが……なにか引つかかる反応だった。

「なるほど。王女様はそこまでおまえを慕っているんだな」

「別にそういうことでもなからう。ただ一緒に風呂に浸かったただけだぞ？」

「なんだ、知らないのか」

ラルファスの口元でピタリとグラスが止まった。

「王女様が裸身を見せ、しかもそのような誓いを――」

言いかけて首を振る。この男にしては珍しく、悪戯いたずらっぽい笑い方をした。

「いや、まあいい。そのうちわかるさ」

「気持ち悪い笑い方すんなよ……似合わないぞ」

「ふふ……そうか？　ところで、王女様にはついていなくていいのか」

あからさまに話を変えるラルファス。

胡散臭うさんくさい思いで見返しつつ、レインは教えてやった。

「ギョウターがそばにいる。あいつの腕はレニより遙かに上だからな。まずどんなヤツが来ても大丈夫だ。この後でまた俺がつくし。今はとりあえず、おまえに報告しとかないといけないだろう」

酒ばかり飲んでいるくせに、「報告しとかないといけない」もないものだが、ラルファスにはこやかに、そうだな、と言ってやった。なんだかんだ言いながら、レインはちゃんと王女の安全に気を配っていると思うのだ。

——ドアの方からノックの音がした。

ラルファスが「誰か？」と問うと、レニの声で「あのー、ウチの將軍は来てますか」という返事。

「なんだよ、『ウチの將軍』ってのは」

レインはしかめっ面くまになり、自ら席を立ててドアを開ける。

「なんだ？　今、非常に重大な話をしてるトコだぞ」

「とか言いつつ、酒の匂いがしますよ」

レニが控えめに反論する。じろつと睨にらみをくれてやると、慌あわてて手を振った。

「いえっ。自分は別になんの文句もないですがっ。それはそうと、その……將軍にぜひともお会いしたいという人が訪ねて来てまして」

「こんな時間にかあ？」

「はあ。自分も明日にしてくれて言っただけですね。なにやら騎士志望の方らしく、どうしても会いたいと——」

「待て待て！　試験はもう終わっただろ。なんで今頃来るんだよ！」

「いや、自分もそう思いますけど……とにかく押しの強い人で。会ってもらえませんかね、將軍。城門でテコでも動かないんで、立ち番の者が困ってるんですよ」

「うーん……」

レインは髪をかきあげ、ふと思いついて尋ねた。

「男か女か、どっちだ」

「は？　ああ、男性です」

「追い返せ！」

即答してドアを閉めようとすると、意外に素早くレニが足を挟んできた。

「わっ、待ってくださいよ！　そう言わずにお願いしますってばっ。自分じゃとても追い返せないんですから。あの人の相手が出来そうなのは將軍くらいですよ！」

レニが拝むように言う。

「どうやら、相手は随分と厚かましいヤツらしい。」

「ああ、わかったわかった。行くからしがみつくなっ」

うんざりしてラルファスを振り返った。

「というわけで、俺はちよつと行って来る。おまえも今晩はもう寝ろよ。捕虜の審問は明日にしてな」

「そうもいかないさ。そろそろ気絶から醒めた頃だろうから、私も、もう行かねば」

言うなり、ラルファスはもう立ち上がっている。

「やれやれ、今晩は色々ある日だな」

久しぶりに寝ることに決めていたのだが、睡眠時間はかなり後にずれ込むようだ。

レインは覚悟を決めた。

今頃はアシマルの効果ですやすやと眠っているであろうシエルファが、少しだけうらやましかった。



渋谷城門まで足を運び、レインは「なるほど、こいつは手強そうな」と大いに納得した。

問題の男は城門の前にどつかと座り込み、両腕を組んで瞑目していた。横で、門番となぜかセルフィーを従えたセノアがなにやらわんわん喚いていたが、目を開けようともしない。

石造りの神像のように、超然とした態度である。

意地でも動かんぞ！ という気迫が感じられた。

ごくごく短い白髪混じりの黒髪に、しわの多い顔。防寒用の革上衣に包まれた身体は、歳の割にやけに逞しい。明らかに、戦いを生業にしていた者の肉体だった。

レインがこの男から受けた印象を一言で形容すれば……まさにオヤジ。

二言で形容すれば、凶々しそうなオヤジ。とにかくどこから見ても、そこの酒場に一ダースもいそうなオヤジである。へべれけに酔っぱらいつつ、「ねーちゃん、いい尻してんなあ、でへへへえ」とかほざいていそうな感じだ。

ただし、鍛え上げられた肉体だけが、その想像を裏切っている。

ともあれ。

件のオヤジに相当手を焼かされていたらしく、レインがズカズカやってくるのを見て、さすがのセノアもほっとした表情になった。

「おい、おっさん！」

レインはいきなり一喝した。

「余計な面倒をかけさせるな。試験はもう終わったんだぞ、帰れ帰れ！」

相手が妙齡の美女なら対応も微妙に違つたろうが、ただのオヤジが相手となるとレインの態度は至極冷淡である。

場合によっては腕ずくで叩き出そうと、早くもシャツの袖をまくっていた。ところがオヤジ本人は、レインの声を聞くなりくわつと黒瞳を見開いた。

「おおうっ」

今までの態度が嘘のようにわたわたと立ち上がり、避ける間もなくレインの手を取る。

「こりゃ懐かしい！ 十年前に会った時とほとんど変わってないじゃないか！ 驚いたぜ」

「……俺はおっさんなんか知らないぞ。それより手を放せっ」

邪険に手を振りほどいた。オヤジに手を握られてもぞつとするだけだ。

「へっ。相変わらず、愛想がないなあ、おまえ」

応えた風もなく、オヤジがにんまりと笑う。挙げ句、しげしげと見返してきた。

「しかし、愛想のなさとはともかく、印象は随分変わったな、おまえ。十年前に会った時はすげークールなヤツだと思つたもんだが、今はなんつーか、顔立ちはあんまり変わらんがよりふてぶてしい面構えになったというか、さらに凶太くなったというか」

「……おいこら。もしかして喧嘩売ってるのかおっさん。俺を怒らせると、後が思いつきりこわいぞ、おいっ。何度も言うが、俺はおまえなんか——」

言葉をぶつとりと切り、レインはオヤジをもう一度、上から下までずずつと観察してみた。埋も

れた記憶をちくつと刺激されたのだ。

「……ひよつとしておまえ……いや、あんた……ガサラムか？」

「おうよ！ 思い出してくれたかつ。いや、こりゃありがてえ。すっかり忘れられたかと思つてがっかりしたぜえ」

わっはっは！ と大口を開けて破顔するオヤジ……じゃなくてガサラム。かつて見た時よりだいぶ老けている。十年の歳月がしつかりとガサラムの顔に表れていた。

「お知り合いましたか……」

疲れたようにセノアが口を挟んだ。

レニとセルフィー、それに門番達は無言のまま、大笑いするガサラムをぼけつと見ていた。

「いやまあ……知り合いと言えれば知り合いだけだな……。しかしあんた、えらく老けたなあ」

思つたままをレインは言つた。

老いるということから無縁になった身としては、少々寂しい気がしたのだ。

「きついなあ、おい。まあ、おまえらしいが。でも、これが普通だろ。おまえが若々しすぎんだよ。どう見ても十年経つた顔とは思えないぞ。……やつぱり、噂はマジだったんだな」

「まあな」

ついつとレインは肩をすくめた。もちろん、その「噂」とやらが、ドラゴンスレイヤーの件であることは言うまでもないだろう。

「それで……わざわざ訪ねてきたのは、俺の顔を見るためか？ いや、違うよな。確か、騎士志望がどうか」

言った途端、機嫌よく笑っていたオヤジの顔が微妙に引きつった。いい歳をして、なにか恥じらうような表情になる。

「あ、ああ。その……おまえが騎士を新規で徴募しているという話を聞いてな。出来ればだ……あゝ……俺も使ってもらえないかなー、と」

「あんたには、警備隊の隊長職があつたら」

「あそこは——」

ガサラムは熱心に耳を澄まして聴衆を横目で見てから、小さい声で続けた。

「あそこはクビになった。もう歳が歳だから、引退してほしいそうだ。……隊長があんまり歳だと不安なんだと——あ、でもなっ」

慌てて言い募る。

「俺はまだまだ戦えるんだっ。別にあそこにいた時だつて職務はきちんと果たしていたしな。ただ頭の固い王都の役人が、もう歳も五十五だし困るとか吐かしやがっただけで。だからよ、ここでも俺は役に立つぞ、ちゃんと！ それに、なにも特例として正騎士にしてくれなんて言わないさ。もちろん、見習いでいいんだ。だから——」

「待てよ、ガサラム」

ほとんど必死といつていい表情で訴えかけるガサラムを、レインは手を上げて止めた。

「待てつて。……ちよつと訊くが、なんで今更騎士見習いになんかなりたがる？ 警備隊に勤める前は、ファヌージュ騎士団の騎士隊長だったんだろ。まあ、あの国には複数の騎士団があつたから

他にも隊長がいたんだろうが、それにしたつて立派なものだ。その後、警備隊の隊長職を務めて金も貯まつたろうし、もう悠々と生活できるだろう。どうしてだ？」

ファヌージュの騎士隊長、と聞いてセノア達がびつくりした顔になった。それはそうだろう。ファヌージュは国土こそ小さいが、ザーマインと同じく「完全実力主義」を採用する国で、その騎士隊長をしていたというのはなかなか凄いことなのである。

なまじの実力では平騎士にすらなれない。

いきなり経歴をばらされたガサラムは、しかし少しも誇らしそうではなく、むしろ益々恥じるように視線を落とした。

あるいは、隊長にまで上り詰めたのに、今になって騎士見習いにしてくれ！ などと頼む自分を情けなく思ったのかもしれない。

老いた戦士は最初の元気がすっかり無くなった声音で言った。

「……昔は昔、今は今だ。かつてはどうあれ、今や歳のせいで警備隊をクビになるくらいだからな。俺だって、もういい加減引退すべきだと思うさ。でも……でもな」

しわの深い顔を上げ、遠くを見るような目つきをする。

「ウチは代々騎士の家系だったせいか、俺はガキの時分から戦うことだけを教えられて育ってきたんだ。今更他の生き方なんて出来ないし、しようとも思わねーよ」

それに、とさらに声が弱々しくなる。

「それによ、俺は剣を取って戦う以外になんの能もないんだ。恥ずかしい話だが、他にはなにもしらねえ。このまま死ぬまで家でぼーっと座ってるくらいなら、戦場で死ぬ方が余程マシってものだろ」

「なるほど、そうか」

レインはわざと軽い口調で返した。ここで下手に同情などするのは、相手に失礼というものだろう。

このガサラムという男は、もしかすると自分の将来の姿なのかもしれない——とレインは思う。ずっと戦士として生きてきた者は、時に普通の生き方が苦痛となってしまう場合がある。

目の前のガサラムも、戦って死ぬ以外の道を選べない男なのかもしれない。おそらく彼は、安らかにベッドで死にたいなどとは考えたことすらないだろう。

この俺と同じく……

「と、とにかくだっ」

レインが黙り込むとガサラムはまたがばつと迫り、熱心に言葉を重ねた。

「そんなことあどうでもいいんだ、うん。俺は雑兵としてもまだまだ現役でいける。ちゃんと戦え

るから、ぜひとも騎士見習いとして」

「ガサラム」

レインは軽く手を上げた。

「結論はもう出てる。悪いが俺は、無駄なことはしない主義だ」

うっとガサラムは呻いた。

荒かった鼻息をため息にかえ、ふうつと吐き出す。

「無駄……そうか、無駄か……」

声に怒りはなく、老騎士の疲れと哀しみのみが滲んでいた。

『將軍！』

セルフィーとセノアが声を揃えて金切り声を上げた。その声に互いがぎよつとなり、顔をしかめて視線を交わす。早い者勝ちでセノアが先に述べた。

「それはあまりに情のないお言葉。ここは快く騎士見習いとして登用するのが、上に立つ者の」

「待て待てっ」

ボコンとセノアの金髪を小突くレイン。

むっとして説明する。

「おまえら、勝手に勘違いしてんじゃないつ。俺は騎士見習いとしては雇わないうて言ってるんだ！」

「なにっ」

いきなりガサラムが復活した。

喜色満面の顔でぐぐつとレインに迫る。

「すると——」

「言つたろ。俺は無駄なことは嫌いだ。ガサラム、あんたは運がいい。上手い具合に、最近になって部隊を再編したところだったからな。……今日からあんたには、千人隊長をやってもらおう。しっかり働いて俺の役に立ってくれ」

ガサラムはそれを聞き、まさに魂を抜かれたような表情をした。

それも無理のないことで、千人隊長と言えば一応は將軍職。彼が若かりし頃に務めた騎士隊長より、もちろん上である。

しばらく弛緩した顔をした後、ガサラムは突如として劇的に真っ赤になり、目を潤ませた。

「おまえ……いや、あなたは……」

なにか言おうとしたのだろうが、声にならない。

そのまま主君に対するように、恭しく片膝をついた。

「……このガサラム、今日のご恩は忘れませんぞ。これからはあなたのために働き、死がこの身に

訪れるまで決しておそばを離れせん……」

「いきなりころりと態度を変えるなよ、気持ち悪い。いいから、力まずに行け」

レインはヒラヒラと手を振って、立つように言つてやった。湿っぽい場面は好きじゃないのだ。

と、やっとセノアが茫然自失の状態から抜け出し、猛然と抗議しかけた。

「そ、それはいくらなんでも気前が良すぎで——」

その時、セルフィーが夢見る乙女のように「素敵すぎます……レイン様」などと呟き、セノアの頬が引きつる。

ずざざざとセルフィーから離れた。

「レイン様……だと？ ま、まさかおまえ、將軍に」

恐る恐る尋ねたが、セルフィーは聞いていない。レインをぼろろと見ていたからだ。

返事は聞かずとも明らかだった。

第三章 お披露目^{ひろめ}の日



サンプルはここまで